

平成20年度

奈良県公立学校優秀教職員
表彰実践事例集

平成21年1月

奈良県教育委員会

目 次

【小学校】

学校教育目標の具体化の部

1 学校教育目標達成にむけての取組

葛城市立忍海小学校 森 吉文 1

教科教育の部

2 高学年社会科における社会的思考力を育てる指導

天理市立二階堂小学校 北野 博康 3

3 数学的な思考力を高め、算数を活用する力を伸ばす指導について

桜井市立城島小学校 菅谷 泰夫 5

4 算数科における児童の「豊かな学び」を支援する教材・教具の開発

田原本町立北小学校 谷 博文 7

5 小学校における英語教育の在り方について

- 小中一貫教育と早期英語教育を通して -

御所市立葛小学校 栗本知世子 9

生徒指導の部

6 豊かな人間性を育てる生徒指導を目指して

斑鳩町立斑鳩小学校 芝田 勝也 11

7 登下校から見える児童の実態・地域とのつながり

- 校門指導・下校指導を通して

三宅町立三宅小学校 泉 明男 13

8 日記指導と学級通信を生かした生徒指導

大淀町立大淀緑ヶ丘小学校 山本 勝徳 15

特別活動の部

9 児童個々が自分らしさを発揮する学芸的行事の実践を通して

平群町立平群北小学校 濱中 哲 17

特別支援教育の部

10 子どものニーズに応じたよりよい支援を行う特別支援教育を目指して

- 特別支援教育コーディネーターの立場から -

奈良市立あやめ池小学校 阪本 敏夫 19

11 特別支援教育を軸とした学級経営

平群町立平群南小学校 北村 治 21

部活動の部

12 金管バンドの指導を通して、協調・努力の大切さを体得させる取組について

河合町立河合第三小学校 原井 栄一 23

その他の部

13 スポーツ少年団と歩んだ25年

大和郡山市立片桐西小学校 河合 孝信 25

【中学校】

学校教育目標の具体化の部

14 教務主任として学校目標の実現に向けての取組について

橿原市立光陽中学校 西田 清文 27

教科教育の部

15 国語科が推進するメディア・リテラシー教育

- 全校で取り組む「表現力向上」の推進役として -

山添村立山添中学校 宮久保ひとみ 29

16 効率のよいTT授業について

宇陀市立室生中学校 佐藤 良昭 31

生徒指導の部

17 当たり前前かが、当たり前前にかできる学校を目指して

奈良市立都南中学校 前川 和由 33

特別活動の部

- 18 生徒会活動を通して学校アイデンティティの確立を目指す
檀原市立光陽中学校 森 博康 35

健康安全教育の部

- 19 健康相談活動を軸とした保健室経営について
- 生徒や保護者の思いに寄り添って -
上牧町立上牧第二中学校 高橋 早苗 37

部活動の部

- 20 コーラス部の指導を通じた情操教育について
下市町立下市中学校 大谷 一仁 39

【高等学校】

学校教育目標の具体化の部

- 21 進路指導と部活動を通して、生徒の自立を支援する
奈良県立西の京高等学校 山口 彰博 41
- 22 「教育コース」設置にあたってのカリキュラムづくり
奈良県立平城高等学校 岩崎 俊哉 43
- 23 開かれた教育理念を目指して
- 総合企画部長としての実践 -
奈良県立登美ヶ丘高等学校 池内玄一郎 45

教科教育の部

- 24 化学的に探究する能力と態度の育成を目指して
奈良県立桜井高等学校 米田 勝洋 47
- 25 手作り教材を活用した座学・実習の指導について
奈良県立御所工業高等学校 佐竹 一郎 49

生徒指導の部

- 26 未来に向かって正々堂々と生きる子どもを育てる生徒指導
奈良県立高取国際高等学校 東 英樹 51

特別活動の部

- 27 学校・地域・警察が一体となった生徒の教育について
奈良県立奈良工業高等学校（定時制課程）
生徒指導グループ 53

進路指導の部

- 28 学校外の教育力を活用したキャリア教育の推進
奈良県立大和広陵高等学校 大浦 宏明 55

部活動の部

- 29 生徒それぞれが自分の目標に向かって取り組む部活動
奈良県立檀原高等学校 吉川 元祥 57

その他の部

- 30 生徒の創意工夫を生かした生徒会活動
奈良県立法隆寺国際高等学校 村井由美子 59
- 31 生徒と向き合う時間を増やすための定型業務の効率化と情報の共有について
奈良県立大宇陀高等学校 北畑 正弘 61

1 実践内容

本校は、学び合う子（確かな学力） 協力し合う子（豊かな人間性） はたらく子（たくましい心身）を目指す子供像とし、併せて「こころほかほか 瞳きらきら 元気もりもり」をキャッチフレーズに、全教職員が一丸になって日々教育活動を進めている。その実現に向け一助になればと、研究主任として次のような取組を進めてきた。



(1) 近畿生活科研究大会、国語力向上モデル事業、総合的な学習

近畿生活科研究大会では「育ち合いにつながる生活科・総合的な学習の創造」を、国語力向上モデル事業では「多様な取組を通して読書に親しませながら、読書意欲を高める指導と評価」を研究主題とし取組を進めた。その概要は下記の通りである。近畿生活科研究大会では、研究会推進委員会を中心に計画、進捗状況の確認・修正、指導講師の校内研修会招聘、研究部だよりの発行（研究進捗状況の報告、今後の予定、各種研修会の案内等）、研究大会公開授業の全学年実施及び研究へのアプローチ等の提案をし、大会に向け全教職員で実践を重ねていった。

国語力向上モデル事業では、研究会推進委員会、図書館教育担当教員と連携しながら、下記の計画を立案し取組を進めた。

年	学期	主な研究内容・取組
	通年の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・学級への貸し出し図書開始（30冊、月ごとに交換） ・図書館環境の整備 ・朝読書（月曜を除く毎朝10分間） ・読書貯金（読書個人カード） ・読書感想メモの掲示 ・図書館便りの活用による読書推進の啓発
十七年度	1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の基本的な構想、研究主題、推進計画の共通理解 ・おはなし会の実施 ・研究経過の検討及び今後の研究の方向についての研修
	2学期	<ul style="list-style-type: none"> ・読書朝会（ブックトーク・ペープサート・群読・影絵・物語の続き話の発表等） ・評価についての研修と評価の設定 ・読書に関する実態調査項目の検討と実施
	3学期	<ul style="list-style-type: none"> ・読書朝会 ・今年度の取組の反省と来年度の研究計画 ・研究紀要の作成 ・学校図書館の環境整備状況の確認 ・図書館補助員との反省 ・選書
十八年度	1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度実践報告と今年度の計画の共通理解 ・公開授業に向けての研修・研究 ・おはなし会の実施 ・読書に関する実態調査項目の検討と実施
	2学期	<ul style="list-style-type: none"> ・授業実践及び検討 ・読書朝会 ・児童の実態調査の変容の分析と評価
	3学期	<ul style="list-style-type: none"> ・読書朝会 ・2年間の研究及び実践の総括と研究紀要の作成 ・選書 ・学校図書館の環境整備状況の確認 ・図書館補助員との反省と来年度に向けて

総合的な学習の時間では、平成23年度から実施される新学習指導要領の実施に向け、より実り多き内容となるよう、年間実施計画の3分割を提案した。具体的には、基礎的活動の時間（総合的な学習を支える技能習得の時間）、応用的活動の時間（本校の特徴を生かした取組の時間）、発展的活動の時間（学年の特徴を生かした取組の時間）と学習内容を3段階に分け展開していくものである。また、総合的な学習の基本方針、総合的な学習の目標、観点の具体的目標、各学年の具体的評価規準等についても提案した。

(2) 国語力「読む」力の育成に向けて

国語力「読む」力の育成に向けては、『「読む」力の育成を中心に据えた「国語科」の研究』を研究主題に取組を進めた。理由としては、この研究を進めることは、児童の理解力や語彙力を高め、すべての教科の基礎・基本の定着にも結びつくと考えたからである。また、学力テストの集計から「読む」力等に弱点がみられ、自分の考えを

もって読み進めたり叙述に即して読みとったりする力が育ちきれていないと分析したからである。

取組の概要としては、研究主題に基づいた内容での授業研究と公開授業、国語科授業改善のための研修の充実、講師の招聘、豊かな言語環境づくり等を計画・立案し、研究・実践を重ねた。また、研究へのアプローチとして、国語科「読む」力の育成に重点を置いた指導はもとより、学年会での教材研究の重視、読書指導や豊かな言語活動の充実等を提案し、日々取組を進めていった。

2 成果及び課題

(1) 近畿生活科研究大会、国語力向上モデル事業、総合的な学習

研究主題をもとに、学年のテーマや人権教育の視点等から、具体的な計画を立て実践していくことができた。何よりも子どもたちが、課題解決に向けての方法を取捨選択したり、目標を再設定したりしながら追究の幅を広げる力が付いてきた。また、読書朝会や朝読書を中心に「読書教育」を学校全体で取り組むことで、読書を日常的に楽しむ子どもたちの姿が多々見られるようになった。



近畿生活科研究大会
での授業

ようになった。近年、本校児童は、生活態度や学習態度等に落ち着きが見られ、「読書教育」を積み重ねてきたことは、その成果の一つであると分析している。

課題としては、文学作品のような読み応えのある本に手を伸ばす児童はまだまだ少ない。また、学習活動の中に計画的・意欲的に読書を取り入れたり、生活の様々な場面で読書を活用することができる児童は育ち切れていない。

総合的な学習に関しては、今年度以降の方向性の叩き台になればと願っている。

(2) 国語力「読む」力の育成

研究主題をもとに、学年の発達段階や児童の実態、育てたい国語力である「読む」



全校読書朝会

力の育成の視点から具体的な計画を立て、実践することができた。また、研究の方向性について論議したり、公開授業に向けて研究・研修を重ねることで、本研究を深めることもできた。学力テストでも、これまで弱さの見られた「国語科」に子どもたちの伸びが見られ、他教科に関しても多くの学年で県平均を上回る結果となった。さらに、豊かな言語活動の充実に向け、発声トレーニング、音読・朗読指導の充実、「視写」の重視、「話す・聞く」の基本的な話型指導等を継続的に進めることができてきたのも今後に向けての大きな成果であろう。

課題は、「読む」ことに関して児童の客観的なデータによる実態把握・共通理解と、それを基にした系統性のある計画の再構築等が必要であると考えます。

最後に、校長先生はじめ全教職員が一丸となって、国語力の向上や生活科・総合的な学習の充実に向け取組を進めてきたことが大きな成果であり、自分自身はこの素晴らしいスタッフのサポートにより、これまでの実践を積み重ねてこれたのである。深く感謝したい。

3 その他参考となる事項

平成17年度・18年度国語力向上モデル事業実践報告集（奈良県葛城市立小・中学校）
平成17～19年度本校校内研究集録

1 実践内容

これまでから「調べて考える社会科」が提唱されてきた。しかし、高学年を担当していると、「社会科は覚えることが多いから嫌いだ。」という児童の声をよく耳にする。そこで、知識の詰め込みで終わることなく、児童自らが問題をもち、調べ、表現する。調べた結果から考察したり、自分なりの考えをもったりするといった問題解決的な学習を進めることが大切であると考え、実践してきた。



(1) 地域の素材を教材化する取組「6年 天皇中心の国づくりをめざした聖徳太子」

聖徳太子が飛鳥と斑鳩を通勤していたといわれる太子道をはじめ、前任校の地域には、聖徳太子にかかわる遺物や伝説が数多く残されていた。まずは、それらをフィールドワークした。児童たちは、聖徳太子について関心が生まれ、各自がもった疑問について調べた。それを一つの年表に表し、当時の様子について考えた。そして、太子のおかれた立場になりきり、十七条憲法を自分たちで作る体験をした。さらに「聖徳太子がめざした国づくりは実現したのだろうか。」をテーマに話し合いをもった。蘇我氏との関係もあり、生きていた間には実現しなかったとの意見が多くしめた。最後に太子が腰掛けて休憩したと言われる石に座り、太子の国づくりに対する思いや苦悩を想像させた。

身近な地域の人物を取り上げることで興味をもち、その人物になりきって疑似体験するといった学習により、児童たちは、歴史上の人物の生き方、考え方に共感することができ、その人物が生きた時代をとらえていくことができる。つまり、「 年に

が～をした。」ということを感じることから、「なぜこの時代に 年は～をしたのだろう。」と歴史を問題視しながら学習を進めるようになるのである。

(2) 地域の人材を活用した取組「6年 地方自治・これからの高齢社会をどう生きる。」

政治の単元では、「地域は国の縮図」といわれるように、地域の具体的な取組を調べることで政治が児童たちにとってより身近に感じられるようになる。

まず地域の高齢者に協力を求め、グランドゴルフを通して交流の場を設けた。そして、高齢者の願いを聞き取った。「一人暮らしや年金生活のために病気が心配」「まだまだ役に立ちたい。」「もっと学びたい。」「話し相手がほしい。」といった高齢者一人一人の願いを実現するために自分たちのプランを出し合った。次に、実際に町ではどのような取組をしているのか、役場、教育委員会、福祉協議会等に分かれて調べに行った。年金、医療補助、支給品など福祉行政に関すること、生涯学習に関すること、高齢者クラブなど高齢者の社会参加に関することなど、政治を通して高齢者の願いを実現するための取組が行われていることを知った。また、条例集を見せることで、それらの取組が法に基づいて行われていることや議会と行政の関係を学習



パネルディスカッションの様子

した。最後に、高齢者、役場、教育委員会、保健センター、ボランティアの代表の人

たちを教室に招き、「これからの高齢社会をどう生きる。」をテーマにパネルディスカッションを行った。それを聞いて、児童一人一人が10年後に自分ができそうなことを発表した。

このように地域の願いや取組を調べ、自分のプランを出し合うといった学習を通して、児童たちは、政治が身近に感じられるようになるとともに、自分も地域の一員であることに気付くようになるのである。

(3) 練り上げることで社会的思考力を高めるための取組「5年 食料生産をささえる。」

まず児童たちの大好物の回転ずしの新聞広告を取り上げ学習に対する関心を高めた。そして、地図帳でそのネタとなる魚介類がどこからどのルートで運ばれてくるのか、地図帳で調べた。高速道路網が整備されていることに気付くとともに、冷凍や活魚のまま運ぶことができる技術の進歩、真夜中も走り続けるドライバーの存在を学習していった。

次に、食料生産をささえている輸入の問題を取り上げた。農林水産省のHPにあるクッキング自給率計算ソフトを使い、日本料理だと思っている料理を調べてみる。すると、自給率が低く、輸入に頼っている料理が多いことに児童たちは驚いた。この意外性のある資料が児童たちの問題意識を高めることができた。教科書で輸入が増えた理由や増えて困る問題について学習した。そして、自給率の推移のグラフを提示し、現在、自給率39%は、今後上がるか、下がるかをテーマに自分の根拠となる資料を作って話し合った。タイムリーな教材であったために、児童たちは数多くの資料を集めることができた。最後に、学習新聞に自給率を上げるための自分なりのプランを、国に、地域に、学校や家庭に提案することで学習を終えた。なお、この学習では、授業で使用した資料を家庭に持ち帰らせ、保護者の方にも感想を書いていただき、家庭でも自給率の問題を話題を取り上げていただいた。



資料を使った討論会の様子

2 成果と課題

意外性のある資料、地域教材、体験活動などを通して教材に出合わせれば、児童の興味・関心を高めることができる。興味・関心を引くことができれば、児童自らが調べていこうとするのである。そして、調べることだけに終わることなく、学習過程の中にディベート的なテーマを設定し、根拠となる資料をもとに話し合う場面を設定することで社会的思考力を高めることができる。特に高学年では、こうしたディベート的な話し合いを好む。そこには資料を読み取るという帰納的な思考だけでなく、自分の根拠となる資料を探すという学習は、演繹的な思考が育っていくのである。

しかし、こうした話し合い活動を成立させるためには、社会科だけでなく、各教科において、「話す」「聞く」「書く」といった言語活動を鍛えておかなければならない。話型や相互指名方法を用いて意見をつないだり、資料を作成させたり、社会科新聞に自分の考えを書いたりする学習技能を計画的に身に付けさせていかなければならない。

3 その他参考となる事項

農林水産省自給率の部屋 <http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/index.html>

1 実践内容

昨年度の全国学力学習状況調査の結果から、「計算力は身に付いているが、その計算力を生活の場で利用することができない『活用する力』が身に付いていない児童が多い。」という報告が出された。

「活用する力」とは、様々な教科や日常生活の中にある課題を自分の知識や技能を使って考え、自分なりに理解を深め、習得し、さらにはその習得したことを筋道立てて相手に分かるように表現する力である。どのようにすれば、子どもたちに活用する力をつけることができるのだろうか。

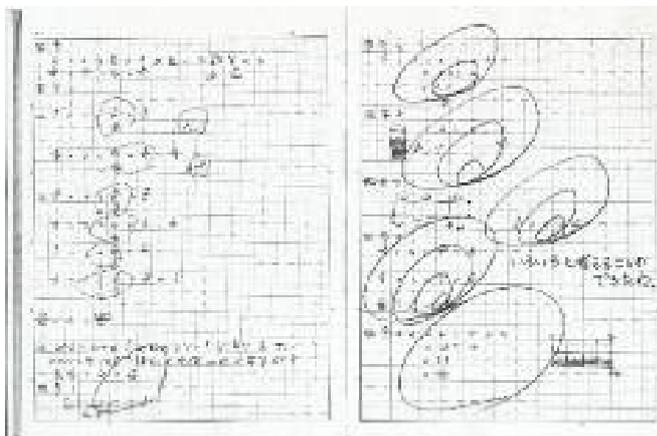
まず、教え込むのではなく、考えさせることが重要となる。電卓を持って買い物に行っても、式を考えることができなければ、電卓は役に立たない。「考える」ことは、非常に重要なのである。さらに単に覚えた事柄でなく、自らがしっかり考えたものは身に付きやすい。また、どんな問題であっても「こうすればいいのか。いや待てよ。」などと、考えようとする姿勢そのものが育つことも大切なのである。

担任をしていた6年生の子どもたちに算数の授業ではどんな時が楽しいかを聞いてみた。結果は下記のようになった。

- ・問題が解けたとき気持ちがいい(25.9%)
- ・いろいろな解き方を考えられる(22.2%)
- ・みんなと考えたり、話し合ったりできる(18.5%)
- ・むずかしい問題を考えること(11.1%)

「解けたとき気持ちがいい」は予想できたが、これを「考えて解けた」とみなすと、実に8割近くの子どもの様々な形であれ、「考える」ことが楽しいと答えている。学年が上がるに伴い、算数の本来の楽しさを感じる子どもを増やし、活用する力を伸ばすためにも、課題や展開等を含め、考える授業づくりを創造する必要がある。

次に、様々な考えたことを中途半端なままで頭に入れておくのではなく、それを理解



子どもが書いたノートの一例

し、習得する手助けのための「ノート指導」がある。考えたことを絵や図、数直線、数式などを用いて書かせるのである。図や考えという意味で、学級では「ずこ」と呼び、「図考1」「図考2」などという名称をつけ、できるだけ多く書かせている。左に掲載したのは、6年生の「分数のかけ算」の導入で子どもが書いたノートの一例である。

最後に、表現する力を伸ばす手立てであるが、ノートに記入が終わったあと、各グループで自分の考えを書いたものを見せながら説明したり、質問を受けたりさせて



分数のかけ算の板書例

いる。ただ、この表現する力は算数科だけで身に付くものではない。他教科での同様な場面、総合的な学習の時間といった学習活動のほか、朝の会や帰りの会などといった様々な場面で身に付けさせていく必要がある。このような形で授業を進め、最後にその日の算数日記(ときには振り返りとしてノートに書かせることもある)を書かせている。ある日の算数日記には次

のようなことが書かれていた。

- ・ 今日やった問題の「図考1」の考え方を聞き、「そんな方法もあるんだ。」と思いました。いろんな方法を見付けたいです。
- ・ さんのやり方は考えつきませんでした。すごいと思いました。
- ・ 前のとき さんのやり方は分からなかったけど、今日、図を書いて自分でやってみたらよく分かりました。

これらの算数日記は、子どもがどのような気持ちで授業に取り組んだかを知ることができるとともに、関心・意欲の評価材料にもなる。

一つの授業に関しては、以上のような組立を意識して進めなくてはならないが、日々の生活で身に付けておきたいこともある。例えば、「学級内の共感的な聞く・話す態度」「数・量・図形に関する正しく、柔軟な感覚」「式から答えに近い値を短時間に出せる見積りの力」などである。思考への興味付けや、理解を深めるということでパソコン等の有効利用も考えていくべきであろう。

2 成果及び課題

1時間かけて指導すべき算数の内容を「10分でここ終わった。」などという先生の話を目にする。「教科書の行間を読む」ことをせず、考えさせる時間も与えていないのだろう。これでは、活用する力の基礎となる算数を考える力は育たない。やはり時間をかけた教材研究が必要となる。

また、少し分からなければ「もう考えるのがいや」などという根気や忍耐力のない子の指導や、間違いをお互いに認め合える教室の雰囲気づくりなど、授業以外の場面でも身に付けさせるべき課題は多い。

最近、同じ子どもたちを2年続けて担任をする持ち上がりは、多くの事情で以前に比べて少なくなった。そうすると、目の前の子どもたちとのかかわりも担任を始める4月から、3月までの1年間となる。この期間で、上記のことを頭に入れながら算数の指導に当たっても、どの程度子どもたちに「活用する力」が身に付いたかは極めて疑問が残る。ただ、算数日記などに「以前の算数はあまり楽しくなかったが、今の算数の授業は楽しいです。」や「一つの問題なのにこんなにいっぱい方法があるなんてびっくりしました。」などの感想が書かれているとうれしくなる。今後もこのような感想をもってくれる子や、算数を活用できる子が一人でも増えることを信じ、研究を進めたい。

3 その他参考となる事項

平成16年度研修講座「確かな学力を育てる具体的授業について」教育研究所講師資料
平成20年度研修講座「児童の学習意欲を高める授業づくり」教育研究所講師資料

1 実践内容

算数科における児童の「豊かな学び」を奈良県算数数学教育研究会では、次のようにとらえている。

算数を学ぶ楽しさやよさを感じられる学び

数理の図形の仕組みの規則性や論理性、明確さなどを感じられる学び

日常の事象について見通しをもち、筋道を立てて考える学び

子ども自身が学んだことを生かし、なかまと交流しながら、認め合ったり高め合ったりできる学び

この児童の「豊かな学び」を支援する教材・教具の開発に関する、これまでの実践をいくつか抜粋してここに報告する。

【実践1】「 $1000\text{l} = 1\text{kl}$ 」、「 1kl の水の重さ = 1t 」の指導のために

6年生「メートル法」の指導において、「 $1000\text{l} = 1\text{kl}$ 」、「 1kl の水の重さ 1t 」であることを指導するに当たり、身の回りの物で 1kl を構成することを考えた。

まず、大和郡山の清掃工場(当時は、ペットボトルをつぶさない状態で回収)をお願いして、20ペットボトルを500本集めた。20ペットボトルは、直方体に近い形をしているので積み上げることができ、それらをひもで固定し、 1kl (1m^3)分の水を構成するのに便利である。(1.50ペットボトルなどは積み上げた時に隙間が多い。10牛乳パックでは、水漏れが心配。)

授業では、10分の水の重さが 1kg であることを確かめ、その重みを体感することから始めた。自分の体重分の重さの水を持ち上げたり、「力自慢大会」と称して、何リットル(何 kg)の水を持ち上げることができるかなどを体験させたりした。

【実践2】図形指導のために

指導用と児童用のジオボードを制作した。市販のジオボードにはない記号入りのジオボードを制作した。ピン1本1本に記号を入れておくことにより、児童がお互いに自分の考えを説明したりするときに役立った。

また、このジオボードは、その後も長年持ち歩いているが、指導用(教師用)ジオボードは、児童が図形を構成する遊びなどによく活用している。

【実践3】図形指導のために

「三角形と角」の指導で、三角形の3つの角を切り取り、それらを合わせて 180 度を構成する際に、手先が器用でない子どもたちにも簡単に扱え、3つの角がずれたりすることなく、さらには、そのまま黒板に掲示できるように個人用マグネット式ホワイトボードを制作し、使用した。この個人用マグネット式ホワイトボードは、磁石がつくことはもちろんのこと、ホワイトボードとしても利用できるので、「三角形と角」の指導だけではなく、いろいろな場面での利用が考えられる。



【実践4】円の半径の指導のために

ワックスの缶(大きな円筒形)とメジャーを使って運動場に渦巻を描いていく様子をビデオに撮り、それを映像コンテンツとして児童に見せることにより、円の半径が一定であることに気付かせた。(渦巻きは、体育の『渦巻きジャンケン』用のため)

ワックスの缶にメジャーの端を固定し、その場所を中心として10m離れた位置から回転を始める。ワックスの缶にメジャーを巻き付けながら描き進むため渦巻が描かれる。ビデオはDVDに変換し、繰り返し児童に見せ、円との違いに気付かせた。

【実践5】円周率の指導のために

児童が実際に円周と直径を測定し、その数値から円周率を計算する授業を行った。その際に、数値が「3.14」に近づくよう、測定時の誤差を少なくするために直径測定器を作成し使用した。

作成した物は、プラ段(プラスチック製段ボール)の上に長方形に切ったウレタンシートを両面テープで貼り付け、三角定規を挟み込むレールを作っただけの非常に簡単な物である。



重さを体感する様子



ジオボード

2 成果及び課題

【実践1】では、実際に1ℓ、10ℓ、自分の体重分等の重さの水を手にとってみる体験をすることにより、児童一人一人の量感を身に付けさせることができた。【実践2】、【実践3】では、児童が簡単に図形を構成したり、その構成した図形についての説明をしたりすることが容易になり、図形理解を深めることができた。【実践4】では、渦巻きが描かれていく動画を見ることで、円の半径は一定の長さであることに多くの子どもたちが気付けた。【実践5】では、実際の測定値からの計算で円周率「3.14」にかなり近い数値を導き出すことができた。そのことにより、円周率の意味理解を深めることができた。

最近、算数の研究実践ではデジタルコンテンツを多く使用している。デジタルコンテンツでは、児童が同じ操作を繰り返し行ったり、その学習をふり返ったりすることができるよさがある。しかし、デジタルコンテンツでは、実際に重さを感じたり、具体物を操作したりすることはできない。

そこで、実際の物を使った学習とデジタルコンテンツを使った学習のそれぞれの特長を生かしながら授業を組み立てていくことが、児童の「豊かな学び」を支援することに繋がると考える。

1 実践内容

本校は、平成15年8月末、葛小中一貫教育特区の認定を受け、5年生と6年生で英語科の新設が決まり、新しい教育課程の編成の一貫として英語学習の取組がスタートした。小学校での英語学習の取組は初めてということもあり、ALTや中学校、学級担任との連携等を密にするパイプ役となり、学習を進め、取り組んできた。以下、その取組の概要を述べたい。



(1) 小中一貫教育を基にした年間指導計画の作成について

特区認定が決まってから、平成16年度の試行に向けて、「コミュニケーション力と国際理解の基礎を養うための英語学習 - 英語に触れる、親しむ、慣れる -」を目標に位置付け、5・6年生の年間指導計画の作成に取り組んだ。小中一貫教育を確実なものとするための一つとして小学校と中学校の段差を低くし、スムーズに中学校の教育課程に進んでいくためにも、英語学習は重要な教科となる。中学校の英語教員と小学校ではどのように学習を進めていくことが大切なのかを話し合い、中学校のカリキュラムの前倒しではなく、子どもたちの英語への興味や関心を高めていくための学習内容を組み立てることを考えた。また、ALTにも意見を求め、計画的に毎時間の学習内容を検討し、学級担任とともに英語学習に取り組むことができた。

(2) コミュニケーション力と国際理解

国際化が進展する中で、国を前提とした国家同士の相互理解を図ることではなく、身近なレベルで文化を異にする人々と共生する力や外国の言語や文化、人に関心を持ち、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度や能力の基礎を養うための学習を進めた。学習のアシスタントをしてくれるALTには、授業だけでなく、児童と給食をいっしょに食べたり、全校集会で母国の文化について話をしたりする機会をもってもらった。オーストラリアが母国であるALTは、母国で盛んな球技「クリケット」のルールや簡単なゲームの仕方を子どもたちに教えてくれた。また、インドが母国であるALTは、インドの文化とともに代表的な民族衣装「サリ -」を紹介してくれた。このように児童が外国に興味をもつことができる時間が設定できたことは、本校の子どもたちや教員にとって、大変有効であった。初めは、ALTと話すことをためらっていた児童もいっしょに遊んだり、ゲームをしたりする中で、朝、顔を合わすと「Good Morning!」と自分から声をかけることができるようになってきた。



ALTとクリケットを楽しむ

(3) 保護者、地域への啓発

取組を始めるにあたり、小中一貫教育をどのように進めていくのか、また専門でもない小学校の教員がどのように英語学習を進めるのか、保護者からも不安だという意見が多く聞かれた。そこで、どのように学習を進めているのかを保護者や地域に理解してもらうために、月1回「英語科だより」を通して発信し、写真や文章で理解が得られるようにした。また、学習参観日には、英語の学習を公開し、児童の学習内容や学習活動のようすを実際に見てもらうことにより、理解を得られるようにした。そうすることで、児童や保護者に行ったアンケート等からは、英語学習に期待をしている保護者が多いことが分かった。また、それを受けて学習内容の見直しを行うこともできた。

(4) 早期英語教育と9年間を見通した英語学習について

5、6年生で英語学習を進める中で、もっと低年齢からの方が身に付くのではないかという本校の保護者や教員の意見を受け、1年生からの英語教育に取り組んだ。「早期英語教育推進事業モデル校」の奈良県教育委員会の指定を受け、研究を進めた。保護者からは、「子どもが家で英語を話したり、外国やA L Tのことを話したりするようになった。」という意見をいただくことができた。また、歌や身体表現などを取り入れた学習を進めていくことで、低学年の児童が英語学習に親しみやすく、抵抗感も少なく取り組めることが分かった。そして、全学年で学習を進めながら、9年間を見通した小学校の1年生から6年生までの本校の英語学習カリキュラムの作成ができた。



A L Tによる低学年の英語授業

2 成果及び課題

本校は、「英語が得意。」「英語が大好き。」という教員は、わたしも含めてほとんどいない。しかし、子どもたちの大部分は「英語学習が好き。」と答えている。このことは、英語に限らず、すべての学習活動で、子どもに力を付けるためには、「何のために、何を、どのようにして取り組むのか、そして、その成果をどのように検証するのか」という教育の在り方を大切にしなければならないということが、実感させられた。今後、新しい学習指導要領では、すべての小学校で外国語活動が導入される。地域の先進校として、学級担任やA L T、中学校とも連携を更に深め、内容の充実を図り、本校の取組を御所市の他の小学校へ広めていきたいと考えている。

3 その他参考となる事項

メールアドレス E-mail:kuzu-sho@m5.kcn.ne.jp

1 実践内容

(1) 生徒指導との出会い

昭和 59 年に奈良県小学校生徒指導研究会において研究授業をする機会を得た。昭和 43 年に組織された当研究会では、「授業が子どもを変えようという姿勢・考え方に基づき、授業の中で子ども一人一人を生かすとはどういうことか」「子ども一人一人に対するきめ細やかな対応が、授業そのものの質を高め、子どもの変容をより豊かにするのではないか」を実践課題として位置付け、授業における生徒指導のなかみを明らかにする授業研究会がもたれていた。この会に参加して、機能としての生徒指導という認識、子どもを主体的・能動的に学習に取り組みせることの重要性を学んだ。それ以降、当会に参加しながら、自由に意見を言い合える雰囲気の中で、自分で考えたり、調べたり、議論したりといった子どもの活躍の場をいかに多く作っていくかを日々考え実践してきた。



(2) よりよい学級集団の育成

子どもと接する機会を多くし、温かくふれあう中で人間的なつながりができ、心と心が交流し合うことで、指導したことがその子の心に響いていく。また、学級のみならず認められているという実感が次への意欲へとつながっていく。積極的に一人一人のよさを学級内に広め、子ども同士の相互信頼を築き、それぞれの個性を發揮しながら互いに尊重し合えるあたたかいクライミット作りを心がけてきた。一人一人がかけがえのない存在として認められ、それぞれの主体性や個性が尊重され、楽しく、充実した学校生活を送る中で個はよりよい方向に成長し、個が成長することにより学級集団も力を付けていく。しかし最近「きもい、うざい」などの乱暴な言葉で、傷つけあい互いのつながりを妨げている実態がある。今年は、「気持ちよい言葉を使おう」を合い言葉に、認め励まし合える言葉を意識してかけ合う中で、日常生活の言葉に対する感覚を磨かせている。

(3) 全校で取り組むあいさつ運動

斑鳩小学校は、全校児童746名で、37の学区に別れ、集団登校してくる。今まで3か所ある門に教師が立ち、あいさつ運動を実施してきた。一定の成果はあったものの、子どもたちはどうしてもあいさつをして貰うという受動的な立場になってしまう。そこで、あいさつ運動の日を各学級に割り当て、当日いかにあいさつ運動を展開するか、各学級で話し合いをもってから臨むことにした。また、あいさつスローガンを全校から募集した。各学級から一つに絞って出て来たものを児童代表委員会で選考し、「明るいあいさつ やさしいえがお」に決定した。これを各教室に掲示し意識付けをはかるとともに、児童会で横断幕にしてあいさつ運動に活用している。さらに、このあいさつ運動には PTA の方々にも協力をお願いし、共に参加していただ



正門での朝のあいさつ運動

いている。受動的な立場のあいさつ運動から能動的なあいさつ運動となり、朝の気持ちよいあいさつの声が学校に響きつつある。

(4) あたりまえのことがあたりまえにできることを願って

校舎から法隆寺を望むことができる本校の教育イメージは『らんらん(爛々)』である。「和を以て貴しと為す」という聖徳太子が掲げた和の精神を礎に「瞳をらんらんと輝かせ、笑顔で挨拶し合い、いきいきと自ら学び躍動する児童の育成」を教育目標としている。この教育目標の具現化と、規範意識を高め、落ち着きのある楽しい学校生活を目指し、聖徳太子の17条の憲法にちなんで「らんらん17条」を作成した。内容は、「あいさつをする」や「美しい気持ちよい言葉を使う」などコミュニケーションにかかわる条項、



「らんらん17条」掲示
(上は各学級の目当て)

「みんなで使う物を大切に使う」や「ろうかは右側を歩く」など、ルールにかかわる条項、「仲間はずれにしない」や「困っている友達の手助けをする」など、人間関係にかかわる条項、「感謝の気持ちをもちそれを言葉で伝える」や「正直でいること」など、自己の生き方にかかわる条項となっている。どの項目も、あたりまえのことであるが、児童にとってなかなか実践し切れていない事柄を集めている。全校児童にこの「らんらん17条」を配布するとともに、各教室と各校舎棟に掲示し、あたりまえのことがあたりまえにできるように呼びかけ、実践を迫っている。

2 成果及び課題

教室の後ろに、「なくしたい言葉」と「言われて嬉しいひろめたい言葉」とを掲示するスペースを設けた。気付いた折々に子どもたちはその言葉を紙に書いて掲示している。それらの言葉を常に目にすることで、言葉に意識が向き、言葉が人間関係をよくする働きをもっていることに気付いてきた。

乱暴的だった子がスリッパを揃えて脱いでいた。それをみんなの前でほめたことにより、その後率先してスリッパを揃えるようになった。今後もほめて伸ばし、期待して実行を迫っていききたい。

子どもたちの学校生活における時間の大半は、各教科や領域の学習で占められる。それ故、授業の中で子どもの自己実現をいかに支援していくかが大切であるということは言うまでもない。すべての子どもが、意欲をもって学習に参加し、学習の仕方を習得し、自己指導能力を身に付け、自己教育力を高めることができるような学習をいかに構成していくか、更に探究していく必要がある。

ある目標に向かったとき、一人の力では成果が出ないときでも、チームを組んだり、多くの仲間と力を合わせたりすることで、大きな効果が期待できる。日常的に声掛けを繰り返し、常に前向きに、そして教職員自身が一人一人の個性を發揮しながらも、同じ方向をしっかりと見据えて、一体となった全校体制での組織的な教育活動を今後も更に大切にしていきたい。

3 その他参考となる事項

斑鳩町立斑鳩小学校ホームページ <http://ikaruga.kir.jp/>

1 実践内容

(1) 校門指導を始めたきっかけ

異動により本校に赴任してきたのは4年前である。児童が登校に使う校門は一つだけで、校門前が横断歩道になっている。登校をする児童の安全確保とともに、あいさつを交わすことで児童の様子を見たいとの思いから、校長の許可を得て校門指導を始めた。



(2) 校門指導を始めて見えてきたこと

校門指導を始めた当初は、共に登校指導をしていた校務員さんに登校してくる児童の性格やエピソードなどを教えてもらいながら、ただ何気なく「おはよう。」と声をかけていた。ところが、元気な声が返ってくることは稀であった。何故だろうと考え、今度は一人一人の顔を見ながら「おはようございます。」と、声をかけるようにした。元気な声が少し返ってくるようになった。子どもの様子が分かってきたこともあり、元気よく登校してくる児童には「朝からええ顔してるなあ。」とか、「一日元気ががんばるな。」など、また逆に、元気がなかったり、悲しい顔をしていたりする児童には「どうしたん。今日元気ないやんか。」とか、「朝ご飯食べてきたか。」などの声かけを心がけた。すると、更に元気のいいあいさつが返ってくるようになった。また、担当する学年以外の児童とも話す機会が増え、困ったことや楽しかったことを、話し



朝の登校指導の様子

かけに来てくれるようにもなった。特に困った話の時は、すぐに担任や部団担当者に報告をし、解決してもらえるように心がけた。そんな日々の中、あいさつが大きくなるに伴い、標準服・黄帽・名札の着用率が非常に上がってきたこと、部団としてのまとまりが強まったこと、班長としての責任感が高まったことなど、児童に変化が見られるようになった。

この活動をより定着させるために、児童会の提案で、

『なぜ、あいさつをするのだろうか。』『みんなが気持ちよくあいさつをするためには、どうしたらよいのだろうか。』を各学級で話し合ってもらった。また、生活委員会からは、ポスターを描くことで全児童に働きかけた。

(3) 児童と共に歩く下校指導

「上手に登校できるようになってきたなあ」と安心していた矢先、地域の方から「最近よくあいさつしてくれます。」の声とともに、「最近の子はあいさつしませんねえ。」の声が聞こえてきた。また、下校途中にけんかや悪戯も起きていること、さらには下校を見守ってくださっている地域の方に暴言を言っている児童がいることも分かってきた。そこで、今までの下校指導に加え、児童と共に歩いて帰る下校指導を行うようにした。校門指導よりも児童と一緒にいられる時間が長いため、学校での出来事、家での様子、友だちとの関係などゆっくりと話を聞くことができるようになった。また、地域の方と顔を合わせ話す機会が増えることで、地域とのつながりを深めることができた。その中から地域の方の率直な思いや、意見を聞かせてもらえることもでき

るようになってきた。地域の方が「よくあいさつをしてくれますよ。」や「上手に並んで下校できるようになりましたね。」など、褒めてくださったことはすぐに児童に話すようにしている。児童に自分たちの言動が周りの人に評価されていることを知らせ、より頑張ろうと思う意欲を高めさせるためである。また、反対に困っておられる点・注意しなければならない点についても、児童の発達段階に合わせてのクラス指導や全体での指導を迅速に行うようにしている。そうすることで児童と地域の方々がより深くつながれると思うからである。

まだ満足できる活動とはなっていないが、児童を送った帰路、商店や施設に顔を出し放課後の地域での児童の様子を実際に見たり、話を聞かせてもらったりするように心がけている。今年の初め、児童がよく利用している地域の駄菓子屋さんで、子どもが店のガラスを叩いたり、ゴミを散らかしたりして迷惑をかけていることがあった。その時点で指導はしたのだが、その後の様子が気になっ



下校指導の様子

ていたので下校指導の帰路、その駄菓子屋さんに寄ってみた。店にいた子どもたちは「迷惑かけてないよ。」と笑顔を見せてくれた。また、店のおばさんから「最近すごくいいですよ。迷惑なんて何もかかってませんよ。かわいい子たちです。」との言葉をいただき、安堵した。

様々な活動の中から、率直な地域の方の思いや意見を聞かせてもらい児童とのつながりを深めることこそが、地域と学校が同じ方向を向いたよりよい児童の健全育成につながるものと考えている。

2 成果及び課題

朝の校門指導を行うことで、毎日一人一人と必ず一回は顔を合わせながら「おはようございます。」のあいさつをすることができる。顔を合わすことで、その児童の心身の状態を伺い見ることもできる。また、来校された保護者とも顔を合わせ一言二言会話をすることもできる。さらに、校門前を通行される地域の方とも同様の機会を得ることができる。朝、校門前で出会うすべての人が、児童・学校の良き理解者であり良き協力者なのである。

下校指導を行うことで、朝には「おはようございます。」の声しかかけられなかった児童ともう少しゆっくり話すことができる。児童と共に下校することで朝、校門前で出会った方々に加え、更に多くの地域の方と顔を合わせ話す機会を得ることもできる。

校門指導・下校指導を継続して行い、その中から見えてきた問題点や地域の方々からいただいた情報を全職員で共通認識することにより、学校の指導方針が見えてくる。また、地域とのつながりを大切にし、深めることで、地域に愛される児童、児童が安心して生活できる地域、そして児童が愛し、誇りをもてる故郷の構築が可能になるのではないだろうか。実践内容の中で述べたように、本校の児童が安定して学校生活を送ることができているのは、全職員が、児童に対して同じ方向を向いて指導できている点に合わせ、地域の方々の温かい思いやりに包まれているからであると考えられる。従って今後も“継続は力なり”の言葉を忘れず、きめ細やかな児童理解・指導、地域との連携を心がけていきたい。

1 実践内容

(1) はじめに

近年、自己中心的で周囲に気を配れない若者が増えているということをよく耳にする。このことは、小学校の現場においても同様で、学級経営が難しくなっていることや“いじめ”を引き起こすことの一つの要因であるように思われる。「児童が互いを理解し、認め合い助け合って規律ある学校生活を送ることができにくくなってきた」と感じるのは私だけではないであろう。



情報があふれ多様な考え方や価値観をもつようになった親の元で育つ子どもたちは、目標達成に向けて心を一つにしたり、よりよく生きるための価値観を共有したりすることが難しい。

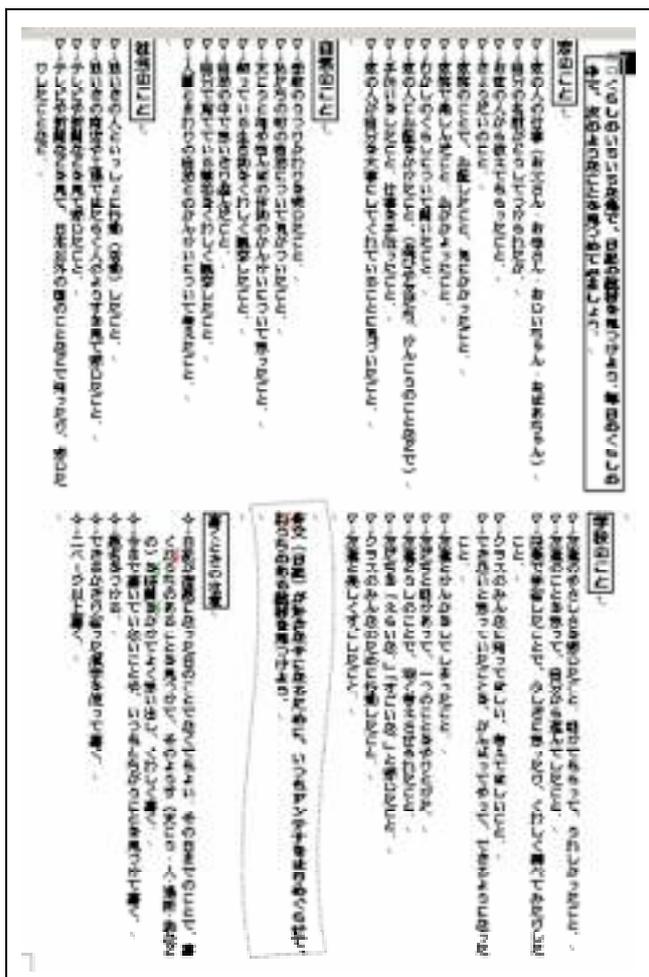
このような状況の中で、生徒指導の基本である児童理解を進め、担任と児童及び児童相互が好ましい人間関係を深め、互いに心をつなぎ、周囲の人々や自然などに気を配って生活できる児童を育てることを目指して取組をおこなった。

(2) 具体的な取組

日記指導を通して

1年を通して日記を書くことを大事にさせようと考えた。中には“何を書いてよいか分からない”“書くことがない”と言って日記を書くことをいやがったり、同じことを繰り返し書いてきたりする児童がいる。そこで、題材を例示したプリント(家のこと、自然のこと、社会のこと、学校のことなどについて具体的な内容を列記したもの)を日記帳の表紙裏に貼らせ、それを参考にして題材を見つけて日記を書くようにさせた。

自分のことだけでなく、身の周りの人や物、社会のことなどに目を向けさせたり関心をもたせたりすることで、世の中には様々な境遇の人がいて、自分のところとは違う家族や家庭があり、多様な考え方や生き方があることを知らせ考えさせることができると思ったからである。



日記の題材プリント

学級通信を生かして

さらに、児童の日記を学級通信（週1回発行）に掲載して、朝の会に学級のみんで読み合い、家庭に持って帰らせるようにした。友達同士や家族で読み合った時に、その内容に共感したり、友達の今まで知らなかった生活や考えを知ったりするであろうし、友達の日記に触発されて意欲的に題材を見付けて書こうとする児童も出てくることを期待したからである。



学級通信の一例

加えて、自分の子以外の子どもたちがどのような生活をし、どのような考え方をしているのかを保護者に知らせる機会にしたかったからである。

また、道徳の授業（1学期最初の給食の日に行っている「いただきます」の授業、児童が書いた「いじめ」についての日記を使った授業、「心のノート」を使った友達のよいところを見付ける授業、大淀養護学校との交流）などの学習内容や児童が書いた感想なども掲載した。学習のねらい（命の尊さや個性の尊重など）を保護者に知ってもらい、家庭で話し合ってもらうことで学習に広がりや深まりをもたせることができると考えたからである。

2 成果及び課題

題材を例示して日記を書かせ、互いに紹介し合わせたり、保護者に日記や授業の内容を知らせたりしてきたことで、児童同士が共感的態度で接する場面を見かけるようになり、日記の内容にも深まりが見られるようになった。また、つながりが希薄になり情報交換ができにくくなっている保護者にとっても、他の子の生活や考えを知り、我が子への接し方を考える手がかりとしてもらうことができた。中には日記や授業について感想を寄せられた保護者があったり、学級懇談会の話題として学級通信の内容を取り上げたりしたこともあった。担任としても児童一人一人の個性の伸長を図り、社会的な資質や能力・態度を育成する上で、その基盤となる児童理解をこの取組によって深めることができた。

今後は、児童一人一人の特性をしっかりと把握し、その個性や能力を伸ばす指導に努めるとともに、受け身な態度が目立つ児童を主体的でやる気をもって学校生活を送るようにさせる指導を進めていきたい。

3 その他参考となる事項

- ・道徳「いただきます」の実践では、無着成恭氏の著書「ヘソの詩」の中にある児童詩を資料として引用。
- ・大淀町立大淀緑ヶ丘小学校e-mailアドレス midori-sho@town.oyodo.lg.jp

1 実践内容

(1) はじめに

子どもたちは様々な場面で様々な人とのかかわりの中で生活している。そのかかわりの中から豊かな人間性を培い社会性を身に付けていくのものである。色々な活動を通して個々の興味・関心が活動内容や役割に生かされ、他の児童や保護者・教職員に認められることで更に積極的に活動を展開する意欲を高めていくであろう。また、友達とのかかわりの中で自分のよさはもちろん互いのよさにも気付いていくだろう。



本実践は、児童個々が自分らしさを発揮する学校行事の学芸的行事（学習発表会）の取組について2学年の児童の様子を中心に述べ、考察を加えるものである。

(2) 研究の概要

指導計画

行事名 学習発表会

ねらい 日頃の学習の成果を発揮し、進んで向上しようとする意欲を育てる。

互いに協力し、よりよいものを作り上げていこうとする態度を育てる。

事前の指導

どんな図案にするかグループで考えて決める。

- ・各班6名の児童が各々2枚ずつの直角二等辺三角形をもつことを前提に話し合った。結果、魚や船や自動車やロケットなどの図案が考え出された。

発表するときの役割を決める。

- ・考えた図案のどの部分を誰が担当するかを話し合った。
- ・他のグループを紹介する児童や学年発表の代表を立候補で選んだ。

発表の練習をする。

- ・グループで練習をした。グループ相互に発表をして、よいところや修正するところの意見を交流した。
- ・学年で発表全体の練習をした。

当日の活動

児童入場 児童はじめの言葉 学校長挨拶 P T A 会長挨拶 各学年発表（1年・3年・5年） 休憩 各学年発表（2年・4年・6年） 終わりの言葉 児童退場

事後の指導

発表会当日はどのグループの発表も成功し、その喜びを学級全体で分かち合った。当日だけでなくそれまでのがんばりがあったからこそその成果であることを確認し合った。同時に他の学年のがんばりやすばらしさを学級で出し合い今後の活動に生かせるように話し合った。



学習発表会の一場面

評価

以下の4つの観点で本行事の評価を行った。

指導計画	—	日常の学習成果の総合的な発展を図り、体験的な活動として有効なものであったか。 ねらいが明確であったか。 創意工夫がなされていたか。
指導方法	—	活動への関心、意欲、態度を高める指導は、計画的に行われているか。 児童の自主的な活動場면을十分確保するようにされていたか。 児童の役割分担が適切に行われ、児童の個性を生かすような指導がなされているか。
集団の変容	—	喜びや苦勞を分かち合い、助け合う中で所属感や連帯感が深められたか。 協同や規律など望ましい態度が養われたか。
個人の変容	—	自分の役割について積極的に成し遂げようとしたか。 集団の一員としての自覚をもち、協力しながら活動していたか。

2 成果と課題

児童自らの手でやり遂げるという心の動きを大切にして指導してきた。指導する中で児童の変化を見ることが多い。本実践においても、発表の仕方に戸惑いを見せた児童が「できるようになった。」と感想をもち、各自の役割を果たす中で「みんなと協力してできた。」や「自分たちで を成し遂げた。」など肯定的な感想を全員がもっていて、上記の評価観点4項目のうち児童の変容に関する2項目はクリアされていた。

特別活動に限らず学校教育全体は児童の主体的な活動が中心をなすが、すべてを児童に任せる活動であってはならない。児童がすることを考えさせ、指導する私たちが束ねていくことが大切である。指導する側はすべてを予測して綿密な計画を立てなければならない。その意味において、上記2項目の指導する側の評価観点も概ね達成されていた。

児童は日々新しいことを求めて活動している。「これまでどおり」などという活動では児童の意欲を削ぐことになる。今後、今まで取り組んできたことの他に先進的な他校（他の教師）の取組を参考にして実践に役立てなければならない。マンネリにならないようにすることが最大の課題である。

学校の特色を生かすというが、他の学校と違うことをするのではないと考える。年々子どもは成長し変化していく。限られた時間と場所をどのように使って教育の計画を立てていくかということが大切である。そのためにも学校教育の目標を踏まえた上で学校や地域の実情にあわせ、更に他の教育活動との関連を生かしたものがこそ学校の特色を生かした学校行事といえる。

3 その他参考となる事項

参考文献 新学校行事読本（教育開発研究所）

1 実践内容

(1) 本校の支援体制

本校では、児童の実態にあわせて 通常の学級の中で担任が支援 通常の学級の中で支援する教員やスクールサポーター等が入って支援 わくわくルーム（校内で支援が必要な児童が個別の支援を受けるための教室）での個別の支援 通級指導教室での支援、の4つの支援体制を用意し、児童への支援を行っている。



主に通常の学級の中で支援を行う児童は、担任が個別に指示や声かけを行ったり、座席などの配慮を行ったりすることで支援ができる児童であったり、学習面や生活面でのつまずきはあっても、担任以外に支援に入る職員が、その児童に合った方法で個別に支援を行うと、その後は概ねみんなと活動できると考えられる児童である。また、わくわくルームや通級指導教室で支援を受ける児童は、言語面、認知面や社会性の面で特別な指導が必要であると判断した児童である。児童のつまずきの実態に合わせて、全職員で協力しながら支援を進めてきている。

(2) 特別支援教育コーディネーターの役割

特別支援教育コーディネーターの役割には、校内委員会での推進役、担任への支援、校内研修の企画運営、関係機関との連携、専門機関との連絡調整、保護者に対する相談等があげられる。

校内で特別支援教育コーディネーターとしての役割を果たすために、特に大切にしてきたことは、次の事柄である。

できるだけコーディネーター自身が直接児童の支援をしない。

学級の中で日々子どもを支援するのは担任である。コーディネーター自身が児童のつまずきに対して支援するのではなく、担任とコーディネーターが児童の実態をもとに意見を交換し合い、担任自らが様々な支援の工夫を行えるようにすることが大切である。

学級担任も専門家である。

通常の学級の児童に対しての指導については担任は専門性をもつ教員であることである。児童のことをよく理解している担任の意見も尊重しながら、児童の実態とそのもとになるつまずきの原因をていねいに話し合い、児童への支援を担任が考えるようにすることが大切である。

児童のつまずきの原因を、保護者や担任のせいにしない。

ややもすると、教員は児童のつまずきの原因を保護者の養育態度が悪いから、また、保護者は、先生の指導力がないからと、悪者探しに終わることがある。児童のつまずきの原因を相手側におし付けるようなことになると、よりよい支援はできない。お互いに、情報を出し合って協力しながら支援の方法を考えられるよう

に配慮しなければならない。

以上の事柄を、心にとめそれぞれの事例にかかわっていくことにしている。

(3) 支援の実際

担任への支援では、担任からあげられてきた「気になる子」の授業や生活の様子を観察し、児童のつまずきの実態を把握し、具体的な支援方法を担任と共に考えた。授業場面で児童の様子を観察して担任の児童へのかかわり方、指示の出し方、学習指導の工夫などを提案し取り組んでもらった。

校内研修では、発達障害のある児童への特別支援教育が、特別な場での教育ではなく、通常の学級の中での支援や配慮が中心になるということを職員が理解するための研修会にした。講師には通常学級で学習面や社会性の面で困難さのある児童を支援してきた先生に来ていただいた。

保護者の相談窓口としての役割では、保護者の不安や悩みを聞き、担任と児童の情報交換を密にし、相談活動を行った。相談に当たっては、児童のつまずきの原因は何であるかを探るために、教室に何度も足を運び、児童の学習の様子や友だちとのかかわりの様子などを細かく観察し、教室で担任が支援している事柄を保護者に伝え、保護者にはどのように子どもとかかわればよいのか話した。学習面や社会性の面での困難さに対しては、家庭でどのようなことに取り組みればよいのかを具体的に話した。

また、通級指導教室は通常の学級とは少し離れたところにあることを生かして、社会性につまずきのある児童が教室でパニックを起こしたときなど、クールダウンできる場所としても利用した。その際、児童の特性に合わせて、絵などを使って自己肯定感がもてるようにていねいに話し合った。



児童への説明に使った絵の一例

保護者からの相談は小学校に在籍する児童の保護者からだけではない。就学を控えた、幼稚園年長の子どもを持つ保護者からの相談もある。親の願いや、実態を把握した上で、特別支援教室担当教諭と日程を調整し、体験入学などを行った。

2 成果と課題

特別支援教育では、通常の学級での取組も大切になる。担任は教室の中にいる発達障害のある子にも分かりやすい支援をする必要がある。担任が子どもたちに分かりやすい指導を工夫するとき、いろいろな教室で行われている実践を紹介し、それを取り入れてもらうだけで支援方法がよりよくなった。しかし一方で、発達障害のある児童への指導は、これまで行ってきた、ていねいに教える、繰り返し教えるなどではうまく学習が身に付かない場合がある。そのような場合には、児童のつまずきはどんなところに原因があるのかを明らかにし、指導法を工夫することも必要である。これからも、特別支援教育コーディネーターとして児童一人一人のニーズに応じた支援ができるよう、様々な形で担任や児童の支援を行っていききたい。

3 その他参考となる事項

あやめ池小学校ホームページ <http://www.naracity.ed.jp/ayameike-e/>

1 実践内容

(1) はじめに

“特別支援教育”この言葉を初めて聞いた時、何か新しい“教育”を一から作り上げていかなければならないのではないかと、という印象をもった。しかし、その中身を聞けば、今まで本校が大事にしてきた「すべての児童をすべての職員でみていく」ということそのものであり、これまで行ってきた実践内容と変わらないことが分かった。しかし、この機会に、更にきめ細かい支援方法を構築したいと考え、これまでの職員の児童に対するかかわり方を大切にしながら、教務主任・特別支援教育コーディネーターの立場から次のような取組を提案し実行した。



(2) 取組の概要

学年を担当だけが見ていくのではなく、担任＋（特別支援学級担任・少人数指導担当・専科担当・養護教諭）の2名以上の体制で支援していくことにした。また、一つの授業をできるだけ2人で指導できるような時間割を組んだ。サポートに入る教員は、朝の会、休み時間、給食時間、帰りの会や社会見学、校外学習など可能な限りその学年にかかわるようにした。



支援が必要な児童の実態把握を行い、支援の方法等を話し合う会議を3つもつことにした。

- ・特別支援校内委員会・・・校長、教頭、教務主任、特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任、人権教育担当で構成し、学期に1回開催する。各学年より支援が必要な児童を挙げ、どの子にどんな支援をしていくのかを考える。関係機関や専門家との連携方法を考える。
- ・教育相談部会・・・養護教諭、特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任、人権教育担当、関係教職員で構成し、月に1回開催する。ある児童について、学級での様子、友だち関係、教員との関係、家庭での様子などを様々な側面から率直に話し合い、実態を把握し、支援方策をさぐっていく。教員同士の肩をほぐし合う場でもある。
- ・特別支援部会・・・各学年から担任以外1名参加し、月に1回開催する。各学年

の子どもたちの実態を出し合い、支援方法を話し合う。学年チームから離れ、教員同士の縦のつながりをもつ場である。

2 成果と課題

授業を2人の教員で指導することについては、教員間で遠慮や不自然さが生じるのではないかと心配されたが、どのクラスでもほとんど違和感なく進めることができたように思う。子どもたちも「なんで先生いるの？」とサポートに入った教員に対する声が聞かれたが、それもはじめのうちだけで、すぐに“この先生はわたしらの学年の先生なんや”という意識が子どもたちのなかに浸透していったようだ。一つの学年をチームで見えていくことで、いろんな成果が出てきた。

- ・担任の負担が軽減され、支援が必要な子にきめ細かい支援ができた。
- ・学級内で個々に対応しなければならない事象が起こったとき、2名いることで一人がその事象に対応し、もう1名が学級全体の指導にあたることができた。
- ・支援が必要な子に限らず、すべての児童を複数の目で見るとは、違った角度からその子を見ることになり、その子のよいところをたくさん見付けることができた。
- ・職員室に戻ってきてからも、学年チーム間で子どもの話をする光景をよく見るようになった。

しかし、児童数の減少等で教員の数が減ってくると、学年をチームで見ることができなくなる可能性がある。また、支援体制を維持していこうとすれば、教員への負担が大きくなる可能性があるということが課題である。

3つの会議をもつことで、本校の特別支援教育の状況が全職員に浸透できたように思う。また、特別支援教育コーディネーターはすべての会議に出席し、それぞれの会議をつなげる役割ができた。3つの会議ではたくさんの子のことが話し合われ、放課後の職員室では学年を超えて子どものことが話題にのぼり話が膨らんでいる。「今日　さん、泣いてたな。」「学校へ来る前にお母さんにおこられたってお兄ちゃんが言うてたわ。」というような話がたくさんされ、自然に多くの子の実態が職員の間で共有されている。児童数150名前後ということもあり、全職員が多数の児童の学校や家でのくらしぶりが見えてきている。

「障害」をもつ子と共に生きるなかまづくりをしていくための支援をするには教員が子どものことを深く理解することは欠くことができない。まずは学級の中で、そして全校の中で一人一人が大切にされるなかまづくりを実践するために、今後も取組を継続させていきたい。



学年を超えて楽しむ玉入れの様子

1 実践内容

1981年4月に新任教師として、生駒市立桜ヶ丘小学校に赴任した。桜ヶ丘小学校は、その4月に新設校としてスタートしたが、母体校である生駒小学校・生駒台小学校の運動会には鼓笛隊行進が伝統的に行われていたために、その伝統を引き継ぐという意味もあって、鼓笛隊指導を任される。その後、クラブ活動に位置付けられると同時に顧問に就任する。音楽活動など全く経験のない私だが、三郷小学校で講師をしている時にお世話になった先生の指導を仰ぎながら活動を始めることとなった。



当時、楽譜の読み方も分からない、楽器の演奏の仕方や手入れの仕方も分からない私がどのように指導をしてきたかという、外部講師の力が大きい。当時は、学校で楽器を購入すると、その楽器の扱い方や練習の仕方を指導しに来てくださった。音楽活動経験のない私が、子どもたちに指導できることは、講師の先生が子どもたちに指導された内容を、毎日のように反復練習させることしかなかった。しかし、結果的にはその練習方法が良かったのかもしれない。次回の講習会までに、教えてもらったことを徹底的に反復練習させるのだから、同じ講習を受けている他の学校の児童よりも確実に習得することができた。その徹底した反復練習が、回を追うごとにステップアップしていく要因になったのではないかと思う。

トランペットの導入が金管バンド結成の足がかりとなり、その後トロンボーンやユーフォニウム・バスなどの楽器が揃い、生駒市内で初めての金管バンド結成となるのである。鼓笛隊発足から4年が経過していた。その後、わかくさ国体の閉会式や西日本管楽器合奏フェスティバル西日本大会で演奏させていただいた。

1987年4月、生駒市立俵口小学校に転勤となった。共に生駒中学校に進学する両校で金管バンドを作るという夢をもちながらの転勤である。俵口小学校では、転勤と同時に提案した金管バンド結成を認めていただき、3年間の金管バンドの指導経験を生かして、多くの学校に眠っている金管楽器を借用しての金管バンド発足となった。俵口小学校では、提案の時から授業で行うクラブ活動ではなく、中学校や高校と同様の部活動としての活動を認めてもらった。朝7時30分から8時25分までの毎朝の早朝練習と放課後4時30分までの練習、土曜日と春・夏・冬休みの一日練習を行った。

朝7時30分から50分までの20分間は、運動場を走ったりマウスピースでの音階練習をしたりして、児童玄関が開くのを待った。校舎に入ってから金管楽器を使っての基本練習（デイリートレーニング）を行うが、基本的にはマウスピースで一曲歌を歌えるようになるまでは楽器を持たないようにした。また、放課後は個人練習やパート練習に力を入れ、半音階やリップスラー・フィンガリングの練習をパート毎に徹底的に積み重ねさせた。簡単な曲を初見で演奏させながら、譜読みの力を付けさせることにも力を注いだ。音楽は耳でも練習できると考え、俵口小学校練習曲というカセットテープを作り、毎日寝る前には必ずこのテープを聴くようにも指導した。

金管バンドの活動は、文部省指定の道徳教育研究指定発表会場でのアトラクション演奏を皮切りに活性化し、奈良県吹奏楽連盟に加盟し、吹奏楽コンクールに出場することになった。以後、吹奏楽コンクールでは、参加した奈良県大会ではすべて金賞を受賞、関西大会においては金賞を3回、銀賞を1回受賞した。その後、コンクールが小学校バンドフェスティバルに改められてからは、全国大会に5回連続出場（3年連続出場後の国民文化祭含む）し、グッドサウンド賞を3回受賞した。また、アンサンブルコンテストでは、9年連続関西大会に出場し、9回金賞を受賞した（小学校は全国大会なし）。さらに、MBS子ども音楽コンクールでは、西日本大会に11年連続出場した。

2004年4月に、現在勤務する河合第三小学校に赴任した。着任と同時に金管バンドの顧問となる。11名の部員と共に、他のバンドとの合同バンドを結成（奈良コスミックジュニアプラスバンド）し、小学校バンドフェスティバル関西大会に出場し、3回連続グッドサウンド賞を受賞した（うち1回は全国大会に出場）。合同バンド出場が認められなくなった4年目には、マーチング連盟に加盟し、あすか野小学校・桜井南小学校と合同バンドを結成して、全国大会に出場し、全国大会でも金賞を受賞した。アンサンブルコンテストでは、4年連続金賞を受賞した。4年目には県代表として関西大会に出場し、金賞を受賞した。MBSコンクールでも西日本大会に出場して優秀賞を受賞した。また、2008年1月19日に開催された奈良県警主催の「いかのおすしー人前」のダンスコンテストに出場し、最優秀賞を受賞した。

コンクールだけではなく、地域に根ざした金管バンドを目標に、地域の行事「町民体育大会」や「ふれあいの集い」「ウィンターコンサート」等にも積極的に出演する。春休みには、地域の方々を招いての「春のスペシャルコンサート」を開催している。

入部当初、全く楽器の演奏ができなかった児童が、毎日の努力の積み重ねによって、楽器を演奏することができるようになる。練習中に泣き出してしまう児童やすぐにあきらめてしまう児童を励まして、その苦難を乗り越えさせる。教師の役割は、子どもたちに注意力と努力を喚起することと考え、これまで指導してきた。

2 成果及び課題

金管楽器は楽器をもってすぐに演奏することはできない。唇の振動を音に変えるため出したい音を出すことができるようになるまで、コツコツ努力を積み重ねなければならない。技術の習得のためには、週に1・2回の長時間練習より、少し短くても毎日練習を積み重ねることの方が大切である。また、曲作りにおいては、一人がいくら上手くても良い音楽にはならない。メンバー全員が、音程や音色を合わせるように努力したり音量のバランスを考えたり、音の形や長さを揃えなければ素晴らしい音楽にはならない。子どもたちはバンド活動を通して、コツコツ努力を積み重ねることの大切さや友達と協力して一つの音楽を作り上げていく楽しさを学んでくれていると思う。バンド活動で身に付けた力を学校生活にも生かせるようになってほしいと願う。課題としては、部員の確保と後継者の育成があげられる。



全国大会での発表の様子

1 実践内容

新任教師としてスタートした今井小学校でスポーツ少年団を立ち上げてから、早くも25年が経とうとしている。一人でも多くの小学生にスポーツをすることのすばらしさを経験させることはできないかと考え、新任校で女子のバレーボールチームを立ち上げて8年間活動した。早朝練習を取り入れ、みんなで公式戦で1勝することを目指して練習をしていたことが、まるで昨日のこのように思い出される。ボールやユニホームを準備するのなかなか難しく、多くの保護者の協力を得て活動したり、市内のチームに練習試合に行く時は、みんなで仲良く自転車に乗って移動したりした。早朝・夕方・休日の時間を使っての活動であるが、年々充実したものになっていった。



そのかいあって、3年後にスポーツ少年団の近畿大会に出場することができた。普段、学校では経験できない多くのことを学んで帰ってきた。

第10回記念小学生バレーボール全国大会（平成2年）に初の出場を決めた時の感動は、今でも忘れることはできない。子ども・保護者と流した涙は、今でも私の良き財産になっている。憧れていた東京での経験は、子どもたちや保護者にとっても、一生忘れられない宝物になったと確信している。

その後、片桐小学校に転勤して男子チームを立ち上げた。集まってくれた子どもたちと話し合っ、放課後・休日を使い少しずついろいろなものを積み上げていった。新しいチームなので、ここでもボールを一つ準備することからスタートしていった。保護者会・OB・学校・地域の方々の支えのおかげで多くの子どもたちが集まってきてくれた。平成6年に片桐VBCとして初の全国大会出場を成し遂げた。私が着任して3年目の達成であった。その大会で第3位になり幸先のよいスタートとなったが、その後は全国大会に出場するもなかなかそれ以上の結果を出すことができなかった。全国の高い壁にぶつかりながらも、誰一人あきらめることなく、自分たちができる範囲の中で努力を惜しまず練習をした。悲願が達成したのは初出場から10年後の平成16年のことである。苦しい試合を勝ち抜き、東京体育館のセンターコートで、全国大会初優勝の歓喜の雄叫びをあげることができた。

今年度は、大会前の調子は決して良くなかったが、東京に入ってから大きな風を受けたかのように勢いづき、予選1日目3連勝、2日目も3連勝して準々決勝に駒を進めることができた。準々決勝、準決勝を勝ち抜き、夢にまで見た決勝戦の舞台に再び上がることができた。今



平成20年度全国大会 選手保護者一同

までの片桐の歴史の集大成のように感じられた。決勝では敗れたものの胸をはれる準優勝であった。

現在は、県内10校の小学生約60人が集まり、それぞれの目標に向かってみんなで力を合わせて、仲良く練習をしている。片桐VBCのモットーは2つある。一つが「のびのびバレー」、そしてもう一つが「練習は嘘をつかない」である。私はいつも子どもたちに「家のこと、学校のことを1番大切にすること。小学生は勉強が1番。勉強をして、学校や家での仕事もすること。そしてテレビ・ゲーム・遊びを我慢してその分バレーボールをしよう」と言っている。「練習は嘘をつかない」頑張ったら必ず努力は報われる。これからもこの言葉を信じて子どもたちの前に立つ。

中学校に進んでも、進学した学校にバレーボール部がない学校が増えてきている。バレーボールが大好きな子どもたちがいつまでも続けていけるように、今年から、新たな取組として、クラブチームを立ち上げた。今のところ12～16歳の20人が毎日曜日に集まってバレーボールを楽しんでいる。これからも生涯にわたってスポーツを楽しんでいく気持ちを大切にしていきたい。



平成20年度全国大会決勝

2 成果及び課題

- ・平成2年 全国大会 初出場 (今井クラブ・女子)
- ・平成6年～20年 全国大会15年連続出場中 (片桐VBC・男子)
(連続出場、大会記録更新中)
- ・平成6年 全国大会 第3位
- ・平成16年 全国大会 優勝
- ・平成20年 全国大会 準優勝 (ベスト8 3回)
- ・近畿選手権大会 優勝 5回 準優勝 4回
- ・奈良県教育委員会スポーツ賞 (団体の部) 受賞 片桐VBC (平成16年度)
- ・奈良県教育委員会スポーツ賞 (指導者の部) 受賞 河合孝信 (平成16年度)
- ・財団法人奈良県体育協会 (奨励賞) 受賞 片桐VBC (4回)

今後は、若い指導者・子どもたち両方の育成体制を充実させていくことが大切になる。私は現在、奈良県バレーボール協会の指導普及部長として6年間、奈良県体育協会の委託を受けて、ジュニア一貫指導、U-15育成・強化事業を担当してきた。しかし、指導者の高齢化・若い指導者の減少化が止まらないのが現状である。中学校で男子バレーボール部が減少傾向にあることや、スポーツをする小学生が少なくなっているのも気になる。これは社会の構造が今までと大きく変わってきているのが要因になっていると推測する。幸いにも片桐VBCは保護者会・OB・学校・地域の熱い支援を受けながら活動しているので組織も健全で大きなものになってきた。

これからも、子どもたちの汗をいっぱいいた元気な笑顔を求めて日々精進していく。

3 その他参考となる事項

片桐VBCホームページ <http://www.houwa.net/vb/katagirivbc.html>

1 実践内容

(1) 校時の変更について

本校では午前中3限授業後に給食を食べていたため、半日授業の際は他校と比べて1時間授業が少ない状態が続いていた。このことは学校教育目標である「低学力の克服」に向けた基礎・基本を充実させることに繋がらないのではないかと指摘があり、授業時間を少しでも確保することが大切であるという認識から、管理職を中心に職員会議で話し合い、午前中4限授業へと校時を変更した。



当然のことながら、給食の時間が1時間弱遅くなるために、保護者に対してしっかりと朝食を食べさせてくるように、食育の面からも協力を呼びかけた。そのことと合わせて、行事の精選や時間を短縮して授業数を減らさないように、授業時数をできるだけ確保していった。また、各学期や教科ごとに授業時数を累計して、標準時数を確保するよう確認作業を行った。

それと同時に、光陽タイムという時間を確保して、低学力の克服に向けた取組を進めた。基礎・基本の学力を身に付けるためのプリント学習や落ち着いて学習に取り組めるように読書の時間として利用していった。

(2) チャイムの導入について

授業を大切にすることが基礎・基本を充実させることに繋がることから、教師・生徒のみんなが取り組めるように、新しいチャイムシステムを導入した。

その例としては授業が始まる1分前に音楽を鳴らし、「さあこれから次の授業が始まるんだ」という心づもりをさせ、チャイム着席を推し進めてスムーズに授業が始められるようにした。

さらに、生徒指導部と協力しながら、授業終了後には各階の廊下に次の授業の空いている教師が立ち、生徒が早く教室に入るように指導をして、授業の大切さを学校として推し進めていった。

また、生徒会活動ともタイアップして取り組んだ。清掃の開始や終了、最終下校などの放送を生徒が毎回放送することなく、生徒の声をチャイムに吹き込むシステムを使用することが生徒への意識付けに繋がった。

(3) 「継続は力なり」賞について

生徒が授業を受けるためには、休まずに登校することが大切である。そのため、各学期と年間に「継続は力なり」賞という皆勤賞をつくり、生徒の意欲を呼び起こした。

このことは普段表彰に縁がない生徒でも、きちんと登校し授業を受ければ表彰してもらえるんだというやる気を出させ、さらには基本的な生活習慣を身に付けさせる一

つの効果も生んだ。今年度で教務主任になって3年目を迎えるため、3年間の資料をもとに、光陽中学校の3年間通しての「継続は力なり」賞を表彰していく予定をしている。

(4) 研修の充実に向けて

全職員がいろんな知識を得て、それを学校運営に活かしていくために、校内研修を充実させた。特に昨年度は管理職と協議を重ねながら、文部科学省が推進する学校評価の取組として、職員を対象とした光陽中学校独自のアンケートを作成し、実施・集計して、今年度に向けた方針等を決めていく参考材料とした。

2 成果及び課題

校時の変更を行なった結果、授業時数を確保できるようになった。そのことにより、基礎・基本の学力を身に付けることができたとは簡単に判断することはできないが、生徒が「継続は力なり」賞を励みにする姿のように、生徒のやる気が見られるようになったことなど、学校全体としてよかったと思える。そのことが学校目標を実現しようとする管理職および教師全体の思いとしてつながり、学校全体として活気のある環境ができつつある。

課題としては、基礎・基本の学力を光陽中学校だけで考えるのではなく、各小学校とタイアップしながら、児童・生徒の低学力を克服する方策を考える必要があると考える。文部科学省が実施した全国学力調査をきちんと考察し、地域として取り組んでいける内容やそれぞれの学習段階で取り組んでいく内容をはっきりとさせながら、地域全体として考えていきたい。

1 実践内容

昨今、中学生の間で情報受発信にかかわる問題が深刻化している。本校は山間部の生徒数90名程度の小規模校であるが、ケータイ所持率は年々増加してきた。生徒は素直でおとなしく、情報を鵜呑みにする傾向が見られ、積極的に発言したり、コミュニケーションを図ったりすることも少ない。正しく情報をとらえ、発信者として確かな表現力を身に付けた生徒を育てるため、メディア・リテラシー教育を全校態勢で推進してきた。



(1) 生徒に論理的に読み、考え、表現する力の育成

論理的に書く力を育てる作文指導

入学時の野外活動を題材にした短作文指導から始め、「水の作文」、「少年の主張」と意見文の指導を集中し、全員が自分の体験を基にまとめた分量の作文が書けるようにした。

その後、体験文、意見文、主張文と3年間発展的に指導し、作品はコンクールに応募した。優秀作品は文化発表会で発表させ、他の生徒へのモデルとした。

生徒の論理性を高める「読むこと」「書くこと」「話すこと」の関連指導

説明的文章の重要語や接続語・指示語に着目して論理的構造を分解図に表したり、複数の論説文を評価させたり、聞き取りメモを文章に再構築させるなどの活動を通して、PISA型読解力の育成を図り、意見文や話し合い指導とも関連付けた。

(2) コミュニケーション力を向上させる話し合い指導と演劇教室の開催

1年ではグループ討論、2年はパネルディベート、3年はパネルディスカッションや対談と段階的に指導し、主張をポスター等に図示させるなどの工夫をした。

俳優や劇作家の平田オリザ氏を招き、全学年、ダンスを取り入れた演劇教室を開き、自由な身体表現ができる機会とした。小グループで相談し、劇の続きを創作させた。(例：1年朗読劇「三匹の子豚」、2年対話劇「朝の教室」、3年「電車内で」等)



演劇教室の様子

(3) 国語科からの情報発信で、生徒や教師を啓発

国語科通信(月1回)を発行し、本の紹介、生徒スピーチの概要と講評、授業内容、生徒作品、作品コンクールや検定の案内等を掲載した。生徒には学習を振り返り、展望をもつ機会とし、他教師には生徒の様子や国語科の指導内容を知っていただいた。

ディベートやディスカッションの研究授業や演劇教室、話し合いを取り入れた学活や道徳の公開授業を行い、他教科でもこれらの言語活動が活用できるように配慮した。

(4) 全校態勢で取り組む表現力向上の推進役として、国語科が積極的なかわり

平成15・16年度に文部科学省及び奈良県教育委員会の「国語力向上モデル事業」の研究指定を受けたことを契機に、表現力向上の視点で系統的な指導計画を作成した。

学校教育目標具現化に向け、3部会に分かれて指導した。知育部会は朝読書や読み聞かせ、全校朝礼時の教師講話、生徒スピーチに取り組んだ。教師は年1回、専門性を生かした10分程度の講話を、生徒は年に1回、自由な話題で1分間スピーチをする。生徒審査を

入れた。徳育部会は道徳を充実させ、体育部会は部活動報告等を指導した。

総合的な学習の時間の学習内容を、準備期を含む全5期に整理し、4つの力と1つの態度（「課題設定力」「情報活用力」「実践的プレゼンテーション力」「実践的コミュニケーション力」「主体的に学ぶ態度」）の育成を目指した。全学年10時間程度の総合基礎「国語」の時間を設定し、体験活動と言語活動を関連付け、支援した。



職場体験学習発表会の様子

- ・ 0期（準備期）...原稿作成のしかた、図書室の利用
- ・ 期 [福祉・ボランティア体験] ...ポスターセッション
「自分ができるボランティア」
- ・ 期 [職場体験学習] ...パネルディスカッション「職業を何で選ぶか」
「電話や訪問のしかた」「職場体験をニュース番組風に報告しよう」
- ・ 期 [平和体験学習] ...「平和のメッセージ制作・群読」「沖縄新聞制作」
- ・ 期 [進路学習] ...「学校案内パンフレット制作」
- ・ 期 [自己実現に向けて] ...「自己PRポスター制作」

2 成果及び課題

- ・ 作文指導を継続した結果、様々なコンクールで入選する生徒が増え、全国入選する生徒も出ている。また、どの生徒もまとまった分量の文章が書けるようになった。
- ・ 説明的文章に書かれた情報を吟味して読める生徒が増え、話し合いでは互いの意見を尊重しつつ、堂々と発言できる生徒が増えた。
- ・ 総合基礎「国語」で国語科の指導と関連付けた様々な言語活動を設定し、具体的な方向を示したことで、生徒は活動に主体的に取り組んだ。また、堂々とプレゼンテーションし、さらによりよい方向を目指して積極的にコミュニケーションができるようになった。
- ・ 演劇教室では自己表現の楽しさを知り、積極的に話し合う姿が見られた。より豊かな自己表現と人間関係形成に演劇は有効だと考える。内容や講師の活用を充実させたい。
- ・ 全校スピーチでは、全員、原稿に頼らず、聞き手を意識したスピーチができるようになり、上級生がモデルを示してくれている。話題はまだ身近なことが多いが、徐々に社会や世界に目を向ける生徒も出てきた。聞き手は大変好意的に聞けるようになった。表現力向上をめぐる一連の活動については、保護者からも高い評価を得ている。
- ・ 授業の公開や、国語科通信等の情報発信により、生徒の変容が分かり、教師間にメディア・リテラシー教育への関心が高まり、言語活動を取り入れようとする動きが出てきた。今後、各教科にも様々な言語活動が求められるが、積極的に支援していきたい。
- ・ 全校態勢での表現力向上の取組をさらなる教科間連携に発展させるため、全教育活動関連一覧を作成し、「表現力向上」「情報教育」「国際理解」「環境教育」等の分野で色分けをし、各教科における言語活動の充実を目指した活動の例も示せた。また、シラバスや学び方を示したナビゲーションを作成し、生徒の学習意欲の向上を図った。
- ・ メディア・リテラシー教育の推進は、今後ますます重要となるだろう。情報とコンピュータを扱う技術科との連携を更に強め、情報モラルの指導も確立しなければならない。国語科が中心となって、生徒同士が互いの価値観を交流させ、よりよい方向を目指して話し合ったり、創作したりという活動の場を積極的に設けることが大切だと考える。

3 その他参考となる事項

「国語力向上推進モデル事業」・「校内研究」 <http://web1.kcn.jp/yamazoe-jhs>

1 実践内容

従来行われてきたTT授業は「後ろで見ているだけ」であったり、「机間巡視を行うだけ」であったりだった。教室に二人の先生がいるのだが、両者の連携という面では、あまりなされなかった。特にフォローの必要な生徒がいないときには、授業に集中できていない生徒の注意を促したりするなど、教室内にTT教員がいても、授業者の指導内容までは踏み込んでいくことができなかった。



そこで、より効率のよいTT授業についての研究を行った。今回の取組は、TT教員も授業にいろいろな形で参加をするのである。

数学を例にとって説明すると、

- (1) 授業者が全体説明として例題などを前で行うが、内容によっては、生徒の理解を深めるために、TT教員が生徒の代わりに内容の質問を授業者にしたりする。また、時には誤りやすい誤答の方を発言し、あえて生徒の注意を喚起する。

また、わざと的外れなことを言って、授業者の説明に集中させるなど、ケースによって、いろいろあるが、説明内容によっては、授業者とTT教員との二人三脚のような進め方もある。

- (2) 練習問題については、8題あれば、4題できた生徒から授業者に見せに来る。このとき、授業者が採点するのは、4題目だけの \times か \circ だけを採点をし、説明はしない。

このあと、生徒は、自分で考えるのである。

テストのときの見直しの力をつけていくためにも、 \times の採点からいったいどこで間違えたのかを自分自身で見付ける力を育てていく必要があるためである。



練習問題の採点の様子

\times がついた問題は、もう一度やり直しをさせる。簡単な訂正ではなく、間違えた問題を最初からもう一度ノートにやり直すのである。そういった繰り返しの中から、教師の方も生徒一人一人の力を把握していく。4題目が正解なら、次の問題へ進ませる。

- (3) TT教員は机間巡視をして、例題が示す解き方を練習問題に応用できるように補ってまわる。出だしてつまずく生徒については、つまずいている箇所が続く式を赤鉛筆でうすくノートに書く。途中で迷っている生徒には、例えば $+$ や $-$ 符号や絶対値用記号がぬけている箇所に \circ 印をつけてやるだけで、その続きを自力で進められるのである。それが誘い水になって、意欲的に他の問題を解いていくことができる。

- (4) 8 題目ができたから見せに来る。8 題目が正解なら、1 題目から 8 題目のどれかの解答を黒板に書かせる。順次、8 題目を正解した生徒から解答を黒板に書かせる。これは、早くできてしまう生徒とそうでない生徒の時間調整をはかる意味でも有効である。
- (5) 8 題目ができた生徒たちがすべての問題の解答を書き終わったら、全体で解答の確認をする。8 題目まで早くできた生徒も、4 題目と 8 題目以外の解答の確認はまだであるため、全問の解答の確認が必要になる。
- (6) すべての問題の解答の確認ができていない生徒には、「前の黒板を参考にしていいですよ。」という指示を出し、遅れている分を黒板で確認していく。
- (7) 授業者の全体説明の時に、T T 教員は机間巡視や採点で気付いた点を「質問」「確認」という形で発言し、生徒の注意を喚起する。

2 成果及び課題

実践してきた T T 授業の成果としては、T T 教員がわざと間違えた解答をしてくれることや、説明内容を分かりやすい言葉で質問してくれることで、授業内容の確認をすることができるため、授業に安心感が生まれ、メリハリをつけやすい。

二人の教員で授業を進めることで、個々の生徒に対応しやすくなり、生徒に集中をさせやすい。特に概念的な内容の授業の時に、わざと誤ってみせる先生に、生徒は考える方向性を見出しやすい。

また、教員自身のためにも、他の教員の授業に T T 教員として入ったり、自分の授業を見られたりすることで、互いの授業力の育成にもつながる。

課題は、同じ教科を専門とする教員が T T 教員として授業に入るときには、打合せも短時間で済み、授業中の発言もしやすいが、T T 教員が専門外の教科の教員であるときは、授業者と授業内容の打合せが必要になることである。毎時の打合せが必要となると、互いの時間的な制約もあり、T T 授業を充実させていく上で、さらなる工夫が必要である。

1 実践内容

(1) はじめに

本校では、近年、問題行動の対処にあたるだけでなく「問題の発生を最小限に抑えること」や「大多数の生徒の学校生活を守り、更に向上させる」ことに取り組む、積極的な生徒指導の展開や生徒の力でより良い学校にしていくという方向に力点をおいている。しかし、即効性のある方法はなく、その方針や方向性を決定し、いかに組織的に取り組むか、また、いかにその内容を教師、生徒に浸透させるかが日々の課題ではないかと考える。



そこで、数年前から表題のようなことがらを目標に取組を進めている。その一端をまとめてみたい。

(2) 都南中学校の生活指導の方針

一人一人の生徒を大切にし、命の尊さをかみしめ、豊かな人間関係のなかで思いやりのある心を育てる。

集団の中で、生徒自身が自主的に判断・行動し積極的に自分を生かしていけるような生徒指導の充実を図る。

(3) 方針の設定理由

本校の生徒指導の現状は毎年のように、問題行動が多様化・深刻化・広域化・低年齢化してきている。そこで、小学校・地域・関係機関との連携を密にする必要がある。

しかし、問題行動を起こす生徒は少数であり、多くの生徒は健全に学校生活を送っている。一部「あれ・ゆれ」の見られる生徒に対して心を痛める者も少なくない。多くの者が落ち着いて楽しい学校生活を送りたいと考えているのは確かであり、あらためて、教師・生徒・保護者が一体となり、都南中学校を誇れる学校にしたいと考える。

(4) 学校生活指導目標

学年集団と連携し共通理解にたった指導

命の大切さの指導

基本的な生活習慣の確立にむけた取組

学力の向上と生活の関係を重視した取組

(5) 指導の重点

命の大切さの指導...交通安全、喫煙、薬物、防災など

豊かな人間関係を育む...小集団活動、なかまづくり

生徒の自主的な活動を支援する...生徒会との連携

規範意識の向上...けじめある学校生活、全校（職員、生徒、保護者）で取り組む
キャンペーン活動

部活動の活性化...安全な活動、部活で身に付けた生活習慣の日常化

暴力行為の根絶...生徒間暴力、対教師暴力、いじめ、器物破損など

2 成果及び課題

(1) 学校が望む生徒像や学校生活について保護者に理解を求める啓発

- ・ 4月に実施される定期の家庭訪問で、表題のプリントを学級担任が各家庭に持って行く。
- ・ 「生活指導部だより」や「学年通信」を通じ、学校の様子や取組の中身を具体的な内容を示すことにより学校のスタンスを理解し協力的な保護者が増えた。
学校を応援する気持ちを醸成する。

(2) 生徒の実態に応じたキャンペーン活動の展開

- ・ 「遅刻撲滅キャンペーン」、「PTA朝のあいさつ活動」や生徒会が展開するキャンペーン活動などの全校体制での取組。
学校全体がキャンペーンの目標に向かい、大多数の生徒に意識付けができ、自分の姿や学校全体の弱さを知り、自発的に正しい姿にしようとする生徒の育成ができてきた。

(3) 職員間で「報告」「連絡」「相談」(理解三則「報・連・相」)の意識や実践を定着させる。

- ・ 生徒理解に始まる生徒指導の鉄則を打ち出し、自らがその中心となり、時間と労力を惜しまず、提起し、語り、意見を求め、英知を結集して課題に取り組む。
すべての職員が同じ問題を知り、課題解決に同一歩調で進むことができる。誰に尋ねられても同じ答えが言える強み。一人で抱え込み、苦しむよりも共感し、共働している実感が強みとなる。

(4) おわりに

ここに挙げた内容は、本校の生徒指導の取組の一端にすぎない。上述のような取組を進めるに当たっては、職員が「チームでやる」という意識をもつことが大切で、そのような気持ちで事にあたり、少しでも効果があったことを実感した経験の積み重ねが大切であると考え。これらのことを支える基盤作りは、生徒指導主事を中心とする生徒指導部がリーダーとなって率先垂範することが大事である。様々な場面を経験してきた職員の「智」と「動」の英知を結集できるような環境作りができてこそ、学校がもつ課題を克服していけるのである。

現在、理解を示しにくかったり、無理難題を要求したりする保護者や地域の声に、いかに学校の事を理解してもらおうかという大きな課題がでてきている。地域で力になっていただける方々や関係機関などそれぞれの機能や限界を知り、その協力を得ながら課題解決に向かっていくことも大切である。その力を発揮してもらえるためには情報交換や情報交換の場の大切さを、特に強く実感している。

低学力傾向の克服や基本的な生活習慣の確立など、学校だけでできることではない。今こそ、学校の良き理解者を増やし、新たな取組が必要な時代がやってきているのではないかと考えている。

1 実践内容

(1) はじめに

生徒会執行部を中心に、各学級の代表である室長・副室長および各専門部の部長・委員が、主体的に学校の諸問題に関心を向け行動することは、本校の生徒指導上の様々な課題を克服する大きな力となる。また、生徒会活動を通して本校生徒としての『所属感、連帯感、誇り』を育てようと考えた。



(2) 基本方針

全教職員で指導する。

「育てる」生徒指導の実践の場とする。

楽しくはじめある学校を創造する。

(3) 目標

光中生としてのアイデンティティの確立

生徒会活動を通して、光中生としての『所属感、連帯感、誇り』を育てる。

ボランティア精神の育成

主体的に学級、学校更に地域社会に貢献できる奉仕の精神を育てる。

自治能力の育成

生徒会執行部を中心に、室長・副室長会議、中央委員会、専門部長会議、部活動キャプテン会議を主催し、また学級会での話し合いを促すなど、学校・学級生活にかかわる役割の分担を明確にする。そのことにより、主体性と責任感をもって仕事を遂行し、自分の言葉で論議し、自らを客観的に評価・改善する自治能力を育てる。

(4) 具体的取組

生徒会執行部の育成

執行部会を定例化（毎週月曜日だが、行事前は連日打合せと準備）し、問題意識をもたせるとともに、通信や総会・各種行事の資料づくり、更に集会や行事の運営、掲示・展示内容の力量を高めることを重視した。

生徒昇降口の美化

生徒昇降口は教職員の目が届きにくく、汚れやすい場所になっていた。ここにしっかりとした掲示板を設置し、タイムリーな掲示物（「卒業生からのメッセージ」や「新入生への歓迎メッセージ」、「行事の写真展」、「思い出のアルバム」、「サマーセミナーの作品」など）の掲示を行うようにした。また、3年前から専門部活動として、週に2度、始業前に清掃・挨拶活動を実施し、「朝ボラ」として定着している。

別れと出会いのアクションプラン

卒業式と入学式は生徒にとって人生の転機ともいえる重要な行事である。その行事をみんなで準備し盛り上げるため、執行部、室長・副室長、各専門部がそれぞれ工夫をし、活動する機会をつくった。またこの期間（2月）に新入生体験入学があり、2年生の新執行部と専門部長・キャプテンが、6年生を迎えて、自分たちの初

めでの取組を行っている。この機会に9教科の授業体験や各部活動の体験も実施している。

クリーンキャンペーン

学期末の生徒総会の後、年3回、学級集団を基本として全校生徒が校外に出て清掃・美化活動を展開している。お世話になっている地域社会への奉仕活動と位置付けている。なお3学期は校内とその周辺に重点を置いている。

「光陽中学校生徒会宣言」と強調月間の取組

2年前、当時の執行部の呼びかけで、全校生徒から集めた言葉や文章をもとに、前文と5箇条からなる「宣言」を作成し、生徒総会で採択された。そこで昨年度から、年2回の強調月間を設定し、具体的な取組を始めた。

6月には室長・副室長会議で、「挨拶運動」「授業態度改善運動」「校内重点美化活動」を実施し、11月にはそれに加え、各専門部独自の活動を展開することができた。今年はさらに専門部長会議で話し合い、取組を強化できた。

サマーセミナー（「若人の祭典」と「わいわい塾」）の発展と充実

夏休みの生徒会行事として2日間行った。

1日は、「若人の祭典」と称して、スポーツの部（今年はソフトボールやサッカー、ドッジボール、ソフトテニスなどの他、水鉄砲合戦や宝探しなどのレクリエーションも入れ大いに盛り上がった。）と舞台発表の部（中庭に野外ステージを設置）を開催した。PTAの役員の協力で、かき氷・おにぎり・フランクフルトを作ってもらった。



リーダー研修会
「理想の学校」を発表している様子

もう1日は、夏休みの終わりに「わいわい塾」を実施した。午前の部はリーダー研修会で、理想の学校について話し合った。午後は7講座に分かれて、学校環境づくりや物づくりを行った。地域の方を講師に招き、竹とんぼやお菓子づくり、トールペイントなどを行った。この日は家庭科部が昼食として恒例のカレーライスを作ってくれた。

2 成果及び課題

現在、様々な生徒指導上の課題を抱えているが、本校には生徒会活動の伝統が脈々と生きている。そして、この生徒会活動を通して生徒の中に『所属感、連帯感、誇り』を育てることが急務だと思われた。

自分たちの学校を好きになり、そんな学校を自分たちの手で作っていく営みに、できるだけたくさんの生徒を参加させたいと思って取り組んできた。伝統的取組を改正し、また新たな取組を追加しながら目標に向かって歩んでいるところである。

今後は、それぞれの内容を更に充実させること。生徒、職員がともにイメージしやすい目標を設定し、それを共有すること。生徒、職員のモチベーションを更に高めること。地域の教育力を学校教育に活用させていくこと。などが重要な課題だと考えている。



地域の文化活動「ふれあい・IN・新沢」
にキャンドルライトで参加

1 実践内容

(1) はじめに

子どもたちを取り巻く社会環境や生活様式の変化は、子どもたちの心やからだに様々な影響を与えている。養護教諭は、様々な問題を背景にもった子どもたちの思いを受けとめながら、ニーズに添った支援が不可欠になってきている。本校も例外ではなく、心身の不調を訴える生徒が増え、その理由も複雑・多様化している。それらの生徒やその保護者に丁寧な対応を行うことが、問題解決や自立支援につながると考え、日々取り組んでいる。



(2) 保健管理

既往歴や定期健康診断結果、型糖尿病・喘息・脊柱側湾症・腎炎・アトピー性皮膚炎の重篤な生徒が在籍している。それぞれの子どもの身体的及び精神的ケアを他の教職員と連携し、日々の教育活動が円滑に実施できるようサポートを行っている。生徒が抱えている疾病によっては、思春期における体の急激な成長やホルモンの分泌によって体調管理が難しいこともよくある。また、生徒自身が病気を受け入れられるかどうかの心理的な葛藤を、養護教諭として支え見守っている。生徒自身が自らの健康課題を解決していく力・自己管理能力を育てるため、本人及び保護者への働きかけを行っている。

(3) 保健指導

全校集会、学年集会での保健指導の実施

「健康診断について」「う歯予防について」「保健室の利用について」「感染症について」「かぜ・インフルエンザの予防について」

ストレスマネジメント教育の実施（H16年度より）

各学年の実態に合わせて、自分をコントロールする力を身に付けることを目的としている。



ストレスマネジメント教育の授業



生徒によるグループワークの様子

WYSH教育及びいのちの授業の実施（H19年度より3年生を対象に実施）

人は人とのつながりで生きていること、人間関係を回復させるスキル、将来のことや夢、かけがえのない自分の存在、大切に思ってくれる親の存在のことについて

の内容で実施し、生徒や保護者からは心温まる感想が寄せられた。

(4) 健康相談活動

保健室には、様々な問題を背景にもった子どもたちが毎日たくさん訪れてSOSを発信している。学校の中の温かい空間の一つとして、時には悩みを打ち明けたり相談したり、子どもたちがほっと羽根を休めることができる空間である。養護教諭という身体的不調や心の問題のサインにいち早く気付くことのできる立場と校内教育相談部の一員という立場から、個々の生徒に合わせた健康相談活動を行うとともに、関係職員や関係機関と連携し、日々問題解決に取り組んでいる。

(研修) スクールカウンセラーによる教育相談研修、事例検討会、メンタルヘルス事業の開催「臨床心理士による生徒向けの講演」

(連携) スクールカウンセラー及び心の教室相談員とのコーディネート

(実践事例)

精神的ストレスから意識障害を起こした生徒を医療機関に搬送することがあった。その生徒の抱えていた問題を解決するため、医師・保護者・学校関係者が協議し、スクールカウンセラーによる保護者の面談と養護教諭による生徒へのかかわりをしながら解決に努めた。不登校になった生徒の頑なな心を開かせるために家庭訪問を繰り返し、安心して気持ちを打ち明けられる存在として人間関係を築いた。

入学後すぐ、新しい環境になじめない女子生徒を保健室で受け入れ、情緒の安定と自信を回復させて対人関係が紡げるような支援を行った。生徒との信頼関係をつくりながら、生徒がエネルギーを取り戻せるように保護者への働きかけも行った。他の教職員やスクールカウンセラーなどの協力により教室復帰させることができた。

保護者の放任による不登校生へのかかわりを進めた。昼夜逆転や自傷行為が続く生徒宅に家庭訪問し、生徒の気持ちに寄り添いながら自立支援のための働きかけを行った。将来の希望や目標をもたせながら、進路決定に向けて登校を促した。懇談時は保護者と面談し、子どもへのかかわりを深めてもらえるような働きかけを行った。

2 成果及び課題

養護教諭としての専門的な知識とカウンセリングマインドを生かして、健康相談活動に取り組んでいる。生徒の精神的な不安は保護者の子どもへのかかわりに起因していると考え、保護者への働きかけを大切にしている。心身の休まる開かれた保健室は生徒だけではなく、保護者にも開放し、保護者自身の思いにも寄り添い、抱えきれない問題については、専門機関へのアプローチも行っていきたい。スクールカウンセラーや心の教室相談員のマネジメントを継続し、ケース会議をもち、生徒や保護者への支援をより深め、職員・生徒・保護者から信頼される養護教諭でありたい。

3 その他参考となる事項

ストレスマネジメント教育 「ストレスマネジメントテキスト」東山書房

WYSH教育 <http://www.wysh.jp>

1 実践内容

音楽科の教師として下市中学校に赴任し、コーラス部を指導して16年目になった。本校のコーラス部は、前任者の熱心な指導のもとで多くのすばらしい実績が残されており、「伝統を受け継ぎながら自分のカラーをどのように出していけばいいのか…」と考えた。希望というよりもむしろ不安をもちながらのスタートであった。最初の2年間は、言いようのない重圧の中で悪戦苦闘の毎日であった。そんな私の転換点になったのは、赴任2年目のNHKコンクールで県代表になれなかったことであった。それまでは、「前任者が作り上げられた声質や音楽づくり等々を継続しなければ」ということを常に意識する指導であったのだが、その年のコンクールへの取組の過程を振り返る中で「指導者として、自分が求める音楽や生徒指導を含めたコーラス部の運営を進めなければ駄目だ。」というごく当たり前のことに気付いた。そこからの取組の一端をまとめてみたい。



私は、合唱指導をする上で次の4点を常に心がけて進めてきた。

1点目は「生徒との心の結びつきを大切にすること。」である。教師にとって、目の前にいる生徒との心の結びつきを大切にすることは当たり前のことであるが、いろんな状況にあっては、なかなか難しいことでもある。指導者のその時々感情による不用意な発言や行動によって、生徒の気持ちを傷付けていたり、他の生徒の前で恥をかかせたりしていないかなど、特に女子生徒だけのコーラス部では、思春期の傷つきやすい心情を十分に考慮する必要があると考える。

2点目に、「逃げないで正面から本物の愛情をもって生徒たちとかがわる。」ことである。大阪府内の中学校で合唱指導をされておられる先輩の先生から、「私の指導は厳しいけれど、練習の前後には、花のような、やさしい笑顔で生徒を見て、清らかなひとみで生徒の心を引きつけたい。」というお話を聞かせていただいたことがある。その先生の指導の裏にこのような心構えをもっておられたことに感心させられた。

それ以来私も練習では絶対に妥協せずに生徒たちと常に真剣に向き合い、練習以外では生徒たちを温かく見ていようと心がけるようにしてきた。

そのような生徒たちとの関係の中で、私が音楽づくりに妥協しようとする場合があれば、部員の子どもたちから厳しい言葉が返ってきたり、私の体調を心配した言葉をかけて



関西合唱コンクールの発表場面

くれたりするようになってきた。そんな言葉は私にとって本当に大きな励みになる。

3点目は、「うまく褒める。」ことである。生徒にとってみれば褒められることは嬉しいものである。単純な繰り返しの練習の中で「精一杯頑張っている」と感じた時や、それまでできなかったことができた時などにはタイミングを逃さず褒めることである。それがきっかけとなり見違えるほど成長する子どもたちを何人も見てきた。音楽でも



関西合唱コンクールに参加した部員一同

高い目標を達成するためには厳しい訓練が必要であるが、明るい雰囲気をつくすような厳しさからは良い歌声は生まれない。褒めながら指導を進めて共に汗を流すことで、生徒と指導者の間に本当の信頼が生まれる。その結果として良い歌声が生まれることは確かである。叱るよりも褒め上手でありたいと思う。

最後は、「自分自身の力量を高め、人格を高める努力を怠らない。」ことである。指導者は生徒から見て魅力的でなければならない。指導者としての心と言動、そして何よりも音楽的な力が必要である。言行不一致では不信感が生まれ、音楽的な力が劣っていればすぐに見抜かれてしまう。自分の音楽的な力を高めるために、いろんな分野の勉強をすることも忘れてはならないと思う。日頃の忙しさを理由にして研修を怠ることは絶対に避けなければならない。

若い頃から県内外の先生方との交流を通して多くのことを学ぶ中で、自分なりの指導方針をもつことができてきた。現在も可能な限り多くの方々との交流の機会をもつように心がけている。お会いする度毎にパワーをいただき新鮮な気持ちになる。教師として残された数年間、常に生徒たちと接し、一緒に汗を流せることに喜びを感じる指導者でありたいと考える。

2 成果及び課題

NHK全国学校音楽コンクール奈良県大会において金賞を15回受賞した。同近畿ブロックコンクールで金賞を1回、銀賞を2回、銅賞を7回受賞した。平成10年度には近畿ブロック代表として東京NHKホールでの全国大会に出場した。また、奈良県合唱コンクールにおいて金賞を16回受賞し、関西合唱コンクールでは、金賞を2回、銀賞を5回、銅賞を9回受賞した。

その他に、コーラス部の1年間の成果を発表する場としての演奏会も毎年開催し、保護者や地域の方をはじめ多くの来場者を得ている。近年、県の催しをはじめ、地域のイベントへの参加が増えてきているのも嬉しいことである。

課題としては、本校も生徒数が減少してきているため、今後、部の運営が困難になることが予想されることである。今後は、下市中学校コーラス部の歌声を全校の歌声に広められたらと考えている。

1 実践内容

本校に赴任して4年目の平成15年度から、私は進路指導部長と野球部の監督を担当することになった。野球部監督については前任校でも14年間やってきた経験があったが、校務分掌の部長は初めての経験であったので、果たして2つの重責を担うことができるのか、という不安を抱えながらのスタートであった。しかし、学業と部活動の両立を目指して時間的にも体力的にもギリギリのところまで頑張っている生徒を目の前にして、「学業に専念し、心身の錬磨に励み、何事にも公明正大で責任をもってやり遂げる気概と、困難に打ち克つ力をもった人間を育てる。」という本校の教育目標の実現のためにも、自分の力の限り教育活動に邁進する決意をもって日々の取組を行った。



[進路指導部長としての取組]

生徒が明確な「進路選択」するための情報提供をすること、生徒に「進路実現するための力」を養成する指導計画をつくることの2つを目標とし、具体的に次のような取組を行った。

(1) ガイダンス機能の充実

上級学校の先生方を招聘しての説明会を各学年で開催している。1年生には、「職業の内容」と「その職業に就くための道」を理解する職業別ガイダンスを、2年生には学部学科ごとの模擬授業を受ける学部学科説明会を、3年生には各大学の特色や入試方法を理解するための大学別説明会を開催している。

(2) 「進路の手引」の充実、進路学習のテキスト化

毎年進路指導部が作成している「進路の手引」を単なる統計集・ガイドブック的なものから、生徒や担任が知りたい統計資料を中心にまとめ、さらに2年生の3学期から3年にかけて「総合的な学習の時間」において進路学習のテキストとして使えるように改編していった。

(3) 3年の「総合的な学習の時間」の指導計画

平成17年度の3年生から「総合的な学習の時間」を「進路実現にむけて」というテーマで行うことになり、進路指導部がその企画立案の中心となった。「進路決定へのステップ」「大学・短大・専門学校の違い」「様々な入試方法」「センター試験とは?」といったガイダンス的な授業や「志望理由書の書き方」「自己推薦書の書き方」といった実践的な授業、「実力テスト解説講座」「模試の振り返り」といった実力養成的な授業を企画した。

(4) 教師への情報提供

1・2年生は年間3～4回、3年生は年間2～8回の校外模試を受験しているが、その結果の分析会を教師に対して行っている。すべての教師が全国レベルからみた、生徒の成績の実態・推移を確認し、生徒への指導や教科指導法の改善のきっかけづくりとしている。

(5) 3年担当教師の出前授業

毎年2月に3年の担任教師が1・2年のホームルームへ出前授業を行い、就職や大学入試の最新情報を下級生に伝えている。生徒への刺激になるだけでなく、それを聞く1・2年の担任教師も最新情報を得ることができ、何よりも教師間のホームルーム展開のスキルアップにもつながっている。

〔野球部監督としての取組〕

「正しい野球、本物の高校野球」をチームのモットーとしている。「正しい野球」とは、正しい投球動作や打撃動作を習得することである。まず私が説明するが、肝心なのはその後の生徒のプレーをしっかりと観察することと、それに関して生徒と対話することと考える。生徒は教えてもらったことを必死になってやろうとするが、私の説明不足や言葉の取り違い、今までの誤解していた動きなどの理由で、結果がすぐに出ない生徒のほうが多い。何かを教えたならば、生徒がそれをできるようになるまで責任をもつのが指導者の役割と考えているので、生徒が自分自身の変化を実感するまで付き合うようにしている。毎日書かせている「自己成長記録ノート」は生徒の理解度を知る上で大変役に立った。また、こうした指導の中で、生徒から私自信が知らなかったこと・気付かなかったことを数多く学ぶとともに、どの言葉が生徒に一番伝わりやすいかを考えさせてくれた。「本物の高校野球」とは、高校野球に懸命に取り組んで、自己を成長させることである。特に生徒に伝えたいのは、「感謝の気持ち」である。「なぜ、保護者・学校関係者・野球関係者が、自分たちを応援してくれるのか？単に勝利するためだけか？上手な選手になるためだけか？」という問いかけに対して、「自分たちを立派な社会人に成長させるために、多くの人を支えてくれている。自分たちはそれに応えるためにどんな行動をとらなければならないのか。」と考えられる生徒を育てていきたいと思っている。

2 成果及び課題

進路指導面ではガイダンスや「総合的な学習の時間」の指導を重ねるたびに、生徒の職業理解度、学問理解度は高まっていき、上級学校のことを自ら調べる習慣もついてきた。以前のように現状の学業成績にあわせて進路選択をする生徒は激減した。また、教師に生徒の成績の分析結果をできるだけ早く返すことにより、個々の生徒に対する細やかな指導が可能になった。あくまでも一例であるが、本校生の15%前後が、第1志望にあげる近畿大学の合格者数も平成15年度24名であったのが、平成20年度入試においては45名（ともに現役生のみ）と増加したことが成果としてあげられる。今後もこれまでの取組を常に検証し、更に一人でも多くの生徒が進路実現を果たすことができるシステムをつくっていかなければならない。

野球指導に関しては、実力的には今年の春季県大会でベスト8入りしたぐらいで、まだまだ強豪校との差は歴然としている。しかし、一人一人の生徒は野球技術の向上だけでなく、クラス内や校内でもリーダーシップを発揮するなど、人間性の面では少しずつ成長してきている。今後更に指導方法を研鑽し、少しでも多くの時間を生徒と過ごし、「努力は報われる」ということを生徒に実感させていきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立西の京高等学校ホームページ <http://www.nishinokyo-hs.ed.jp>

1 実践内容

平成16年度、県立高校の特色づくりの一貫として、本校に、「教育コース」(将来学校の先生を目指す生徒のためのコース)設置が決まった。平成17年度に「教育コース設置準備委員会」委員長の任を受け、平成18年度からは教育コース主任を務めているが、全国初の取組であり、暗中模索の中でのスタートであった。しかし、教育コース3年目を終えようとする今、多くの方々の助言や協力を得ながら、体験や活動を中心とした3年間のカリキュラムがほぼ完成し、将来の夢に向かって生き生きと活動する生徒の姿を見ることができるようになった。その取組の概要は次のとおりである。



(1) 平成17年度(「教育コース準備委員会」設置)

教育コースで育てる力を検討 ... 小学校の先生方へのアンケートをもとに、「コミュニケーション能力」「基礎学力」「行動力」「責任感」「想像力・創造力」「向上心」「体力」等の育成方針を決定。

活動方針の検討 ... 上記の力を育てるために、「体験や活動を中心とすること」「様々な人から学ぶ機会をつくること」を教育活動の柱とすることに決定。

教育課程と3年間の指導計画の検討 ... 体験活動を充実させるための学校設定教科「教育」を新設。また、幅広い知識を身に付けさせるための地歴科、芸術科における各科目の必修化、選択単位として「ボランティア」の設置等、特色ある教育課程を決定。あわせて、各教員からの提案をまとめ、3年間の指導計画の概要を策定。

小学校との連携 ... 近隣の小学校5校と「小高連携協議会」を立ち上げ、試行的に、文化祭への小学生招待、運動会補助、ラリーテニスの指導等を実施。

広報活動 ... 中学校や受験生に対し、教育課程や内容が決定する都度、調査広報部と連携し、HPへの掲載や、リーフレット(2回)を発行。

大学との連携 ... 県教委の「教育コース連絡協議会」にて、参加各大学と協議。

(2) 平成18年度(教育コース1期生入学 学校設定科目「教育入門」のスタート)

1期生40名が入学した。学校設定科目「教育入門」では、指導計画にそって、小学校訪問、運動会補助、調査発表等の活動を実施した。大学教授による出前授業も行い、生徒の意欲を高めることに努めた。各授業の「ねらい」や展開について毎週1回担当者打合せ(管理職、学年主任、担任、副担任、コース主任)で入念に準備をし、毎回の授業を充実させていった。また、評価についても、学級担任等と協力しながら、学校設定科目としての点数評価、文章による評価の両面を取り入れ、評価の観点を明確にした評価システムを確立し、学期ごとに生徒に分かりやすく提示した。

(3) 平成19年度(教育コース2期生入学 学校設定科目「教育体験」のスタート)

2年生対象の学校設定科目「教育体験」では、8月の「絵本ギャラリーin奈良」で独立ブースを運営し、子どもたちを楽しませることを目標に企画段階から生徒主体に活動させ、成功を収めた。また、11月には、連携している小学校5校において、3日

間の小学校インターンシップを実施し、生徒一人一人がそれぞれ一つのクラスに所属し、教員の仕事や児童の様子を教える側の立場から実感することにより、素晴らしい体験と感動を得ることができ、多くの生徒が「先生になりたい」という目標を明確にした。



小学校インターンシップ

さらに、奈良教育大学、京都女子大学、佛教大学、同志社女子大学の4大学と教育連携協定を結び、高大連携を通じた教育活動の深化・充実を図った。

(4) 平成20年度（教育コース3期生入学 学校設定科目「教育創造」のスタート）

最終年度を迎えた1期生は、卒業論文として、教育研究レポートの作成に取り組んだ。これは、奈良教育大学と本校との「高大連携支援プロジェクト」により実現したもので、生徒は、これまでの活動を踏まえ、各自が教育に関するテーマを見つけたうえで、大学の研究室等を訪問しながら研究を進め、3年間の学習成果をレポートとしてまとめることを目的としている。6月に中間発表会を終え、9月には、奈良教育大学で代表者8名が大学教員や学生を前にして発表を行った。また、「学びの意味シリーズ」として各教科を学ぶ意味の根本を考える出前授業も行った。3学年が揃い、学校設定教科「教育」の3科目の授業や外部機関との調整でかなり錯綜するが、週3時間の担当者会議を欠かさず行い、十分な打合せや情報交換をすることによりスムーズに進めることができた。



教育研究発表会 於奈良教育大

2 成果及び課題

「高校での教員養成」という全国初の取組で、一定の流れを作り上げることができた。特に、17年度に試行で小学校との連携を行ったことで、次年度以降の取組をスムーズに行うことができた。高大連携においては、体験活動の前後に、大学の先生の授業を入れることで、学問的裏付けや問題解決ができ充実した活動となった。また、生徒は大学での学びのイメージをもつことができ、「7年間で奈良の良い先生を育てる」という共通認識のもと、連携大学との間で真の高大連携を実践することができた。

そして、何よりも、生徒が「聞き上手、話し上手になろう」を合い言葉に、生き生きと活動し、学童保育や様々な小学生対象のボランティア活動に自ら参加する者が多数出るなど積極的に活動する生徒が多いことが嬉しい。生徒アンケートによると、教育コースの活動に対して、ほぼ100%の生徒が満足しており、発表を通して、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が、また、豊富な体験活動により行動力や責任感が向上したと感じている。そして、教育コースの生徒に接する小学校や大学の先生方、地域の方々からも高い評価を受けており、協力いただいている方々に改めて感謝したい。

今後は、キャリア教育の視点から、「教育」の授業で身に付けた力を進路実現に結び付けることと、教育コースの成果を学校全体の教育活動と結び付けることを課題として考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立平城高等学校ホームページ <http://www.heijo-hs.ed.jp/>

1 実践内容

平成15年4月、本校において当時の町田健一校長の尽力により、総合企画部が新たに創設された。総合企画部は、学校開放や学校評価制度、また地域との連携・協力等様々な教育改革が叫ばれる中で、学校教育改革の中核を担い、開かれた教育理念のもとに新しい高校教育を目指すべく立ち上げられた分掌で、民間から転進した学校長の斬新な発想を反映したものであった。



(1) 総合企画部長として

私は平成15年度に本校に着任し、2年間学年主任を務めた後、平成17年度より総合企画部長として本校独自の教育目標を具現化することに努めた。本校は、奈良市西郊の新興住宅街に立地する、県内で最も若い県立高校である。生徒の多くが地元の奈良市や生駒市から通学する、きわめて地域性の強い学校でもある。保護者や地域に対し、本校教育の取組の状況を積極的に発信しながら、今日の高校教育に求められているものを模索し、その声に応えていくことは、本校に課せられた重要な責務の一つであるといえる。幸い、平成18年度には、本校は創立20周年を迎えたが、私はその記念事業の校内実行委員長としても、本校の教育活動の充実と発展を広く内外にアピールすることに努力を傾けた。また、同年度より2か年にわたり文部科学省から研究指定を受けた「コミュニティ・スクール推進事業」の調査研究においては、その中心となって研究を推進し、地域との連携・協力の在り方について多くの成果をあげることができた。

(2) 斬新な学校要覧『碧き風』

このような本校の教育活動を外部に発信する際に、最も大きな力となっているのは、総合企画部が作成している学校要覧『碧き風』である。洗練された斬新なこの学校要覧も、総合企画部創設と並行して創刊されたもので、清潔な校舎とそこで活動する本校生徒たちの生き生きとした表情を巧みにとらえた写真をふんだんに散りばめ、従来の学校要覧のイメージを一新する画期的なものといえよう。本年度（平成20年度）で第6号となるこの冊子が、年々その内容を充実させ、今や登美ヶ丘高校の「顔」として大きな好評を得ていることは、作成担当者として望外の喜びである。



学校要覧「碧き風」

(3) 「学校評価制度」の有効な活用

広報活動とならんで総合企画部の重要な職務の一つである「学校評価制度」の運営においても、学年、分掌、教科という様々な立場からの意見を取り入れ、年度当初から教育目標の具体的設定を行い、プレゼンテーションによって全教職員の意識の徹底を図り、年度末には目標の達成度について自己評価するというシステムを確立した。

また、全校生徒を対象とする学校生活アンケートや授業アンケートについても、学校全体の取組として実施し、学校改善や各教師一人一人の授業力の向上に役立てることができている。

(4) 「総合的な学習の時間」の運営

「総合的な学習の時間」の運営については、その教育目標である「自己表現力の育成」に向けて総合企画部が3年間を通しての指導計画を立案し、総合学習検討委員会での検討を経て、毎週水曜日の第5限に各学級の副担任が中心となって実施している。1年生次では、類型選択を踏まえての大学や短大の学部研究や、出身中学校の後輩たちに向けての本校の学校案内ポスターの作成とその発表を行う。2年生次では、新聞記事の論評とグループに分かれての壁新聞の作成、そして後半は小論文に取り組む。3年生次では、2年生次に続いて小論文に取り組むとともに、進路実現を見据えての志望理由書の書き方や面接の心得等が主な内容となっている。年度末に全学年の生徒を対象にアンケートを実施し、その内容の検証に努めている。副担任の担当とすることにより、学校全体の取組としての意識が、教職員間に着実に浸透しつつある。

「総合的な学習の時間」・LHR年間計画

2 成果及び課題

「奈良県内で最も若い県立高校である本校の、クリーンでフレッシュな校風を広く外部に発信するとともに、それにふさわしい内実を備えるべく教職員の意識も改革すること。」、これこそが総合企画部に課せられた使命であると私はとらえている。この課題が現時点で十分に達成されたとは言いがたいが、ある程度本校の進むべき道筋は示すことができたと自負している。今後は、この道筋をより鮮明に確立していくとともに、本校の創立30周年に向けて、独自の新たな伝統を培っていくこと、そしてその明確な指針づくりが、今後の我々の重要な課題の一つであると考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立登美ヶ丘高等学校ホームページ <http://www.nar-tomigaoka-h.ed.jp>

奈良県立登美ヶ丘高等学校創立20周年記念誌

1 実践内容

化学的に探究する能力と態度を育てるために、毎年3年生の最後に探究活動的な実験を実施している。本校の類型は、文型・文理型・理型の3類型であり、9割以上の生徒が進学を希望している。このうち、化学は1年生において全員履修し、化学は3年生において、理型では全員履修、文理型では選択履修することになっている。



化学の目標は、学習指導要領では「化学的な事物・現象についての観察、実験や課題研究などを行い、自然に対する関心や探究心を高め、化学的に探究する能力と態度を育てるとともに基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成する。」とある。自然に対する関心や探究心を高めるためには、化学において、実験が重要な役割を果たす。生徒には、数多く実験をさせたいが、授業時間数の制限もあり、演示実験にならざるを得ないところがある。化学的に探究する能力と態度を育てるということは、習得した基本的な原理・法則を用いて、自然や身の回りにある物質の変化を化学の立場から解釈し、自分の力で解決する方法を見いだす能力を育成することである。そのためには多くの知識を習得するだけでなく、知識を応用する習慣が身に付いていかなければならない。これは観察・実験を中心とする「探究活動」や「課題研究」によるところが大きい。

生徒が実験を行う際には、常に実験プリントを作成している。そこには必要な器具や方法を記載している。生徒はプリントを見て、その器具を使い、記載された方法どおりに実験を行っていく。そして、結果を考察し、基本的な概念や原理・法則を理解していく。その上に立って、3年生の最後の実験では、今までに習得した基本的な原理・法則を用いて、自分の力で解決する方法を見いだす能力を育成することを目指している。そのため、実験方法や使用器具については提示しない。

最初の時間では、この実験の目的を説明する。実験の目的が「純水と飽和食塩水の2種類の液体の違いを見付ける」ことであることを示し、加えて、その方法は10種類以上考えることと、実験報告書を作成することを指示する。ただし、方法だけでなく、使用する器具も各自で考えさせる。そのため、器具の名称と報告書に記載すべき項目だけは説明しておく。

次の時間は、教室ではなく図書館において、実験方法を考えさせる。本校の図書館にはノートパソコンが設置してあり、書籍だけでなく、インターネットで検索できるようにもなっているので、そこから調べることもできる。報告書は各自で書くが、実験はグループ(1グループ4人程度)で行うので、グループごとに討議させている。「蒸発させる」「通電性を調べる」「硝酸銀水溶液を加える」「炎色反応」等の実験はすぐに気付くが、10種類となるとなかなか見付け出すことができない。多くのグループは8種類程度であるが、この時間に、実験に必要な器具と方法を書かせて提出させる。

次の時間は、いよいよ自分たちで考えた方法で実験を行うことになる。前の時間で報告させた器具をそろえておく。グループごとに自分たちが考えた実験を行わせる。生徒は1時間で10種類ほどの実験をしなければならないので、てきぱきと行わなければならないし、その都度、結果も書かなければならない。

最後の時間は、報告書の作成である。報告用紙を渡し、目的、使用器具、方法、結果を書かせ、なぜこの結果になるかということ考察して記載させる。中には失敗した実験もあるが、それもなぜ失敗したのかを考察させている。最後に感想・反省を書いて提出させる。

生徒は、今までは指示されたとおりに実験していたわけである。今回のような、すべて自分たちで考えなければならない実験に、最初は戸惑っていたが、やがて自分たちで主体的にすることに、やりがいを感じて、楽しんで実験を行った。

2 成果及び課題

生徒は今までに学んだ化学の知識を最大限に生かして、実験方法を考えている。しかし、10種類以上となるとなかなか考え出すことができなくなり、「ナメクジにかける」「卵を浮かせる」といった自分の生活体験を思い出し、化学は身近な出来事であることに気付く生徒もいる。1時間の授業では自分の考えた実験をすべて行うことができなかったため、放課後に再度実験を行う生徒や、実験を行う日に欠席をしてできなかったため、他の日にしたいと申し出る生徒もいる。



実験報告書

「もっとしっかりと計画を立てて行えば良かった」と計画性の大切さに気付く生徒もいる。また、「これまでの実験は、あらかじめ分かっている方法に基づくものだったが、今回の実験は、自分たちで方法から調べて、実験を行ったので、今まで以上に興味もてた」とか、「実験した結果が失敗であっても、気付くことや得ることがあるのだと知りました」と感想を書く生徒もいる。問題が起こったとき、解決する方法は一つではなく、様々な方法があり、その方法が失敗でも、何らかの科学的な知識を得ることができるということに気付いてくれたようである。探究する能力と態度の育成の一助にはなったものと理解している。

3年生の後半のため時間的な制約があり、十分に実験する時間を取ったり、考察を互いに発表させたりすることができなかったことが惜まれる。また、生徒の考察について解説したり、生徒が考え出すことができなかった方法を演示実験で行ったりすれば、より化学に興味をもたせ、問題解決の能力を育成していくことができるのではなかったかと考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立桜井高等学校ホームページ <http://www.sakurai-hs.ed.jp/>

1 実践内容

工業教育における座学や実習の指導では、教材の活用が欠かせない。特に私が担当している電気分野では、目に見えない電気や磁気の現象をいかにして理解させるか苦慮しているところである。そこで、座学や実習で活用できる手作り教材の開発に取り組んだ。

まず、座学においては、教科書に載っている図や写真だけでは生徒の興味・関心を引き、理解を深めるには不十分な場合もある。「百聞は一見に如かず」ということわざにもあるように、たとえ簡単な演示実験でも生徒の注目を集め、興味・関心を引き、理解を深めることができる。しかし、実習とは違い、教室で行う演示実験は簡単に行え、原理がよく分かるものが望ましい。写真1はペットボトルとアルミ箔を用いて作った検電器である。決してスマートなものではないが、静電気に関する演示実験をするには十分なものである。よく理科の実験で用いられる市販の検電器は小さく、アルミ箔も大変薄いものなので、演示実験には向かない。また、写真1の検電器は身近な材料でできるため、生徒に作らせて各自で実験することも可能である。これ以外にもデジタル基本回路の演示装置やスピーカーの原理が分かる模型(写真2)などを製作し、活用した。さらに、授業で生徒の理解を助けるための補助教材として、教科書には載っていない電気の歴史の話(たとえば、クーロンの法則がどのように発見されたかを説明したもの)や、最新技術(たとえば、デジタル放送のしくみなど)について分かりやすく説明したプリントを作成し、授業改善に取り組んだ。

次に、実習においては、市販されている実習装置は高価なものが多いので、その1/10以下の費用で同じような実習ができる手作り教材の開発に取り組んだ。製作したものは、デジタル回路の実習に用いるデジタル信号の入出力装置やエアコンの温度制御などに用いられているフィードバック制御の実習装置などである。市販の実習装置を使った場合では、実習の内容を装置の仕様に合わせなければならないなど、制約を受けることもあるが、自作教材による実習では実習内容に合わせて装置を製作することができるので、ねらい通りの実習ができた。

2 成果及び課題

座学における教材の開発についてはまだまだ実践数は少ないが、身近な材料を使った教材は簡単に製作できることも相まって、生徒に与えるインパクトは大きいものがある。実際、ペットボトルを使った検電器の演示実験では、「こんな簡単な装置で実験ができるの



写真1



写真2

か。」というような声が聞こえてきた。単元の導入段階で活用すると、生徒の興味・関心を引くのに効果的であることが分かった。また、インパクトが大きいということは生徒の記憶にもよく残るようで、演示実験の内容について定期考査の問題の一部として出題すると正解率が高かった。このように簡単に製作することができ演示実験に使える教材の開発については、これからも引き続き取り組んでいきたい。

次に、自作プリントについては、生徒が後で見直したときにも分かりやすいものになったと思っている。このプリントを作成するには、インターネットや書籍を活用して情報を集めているが、なかなか思うような図や写真、データが集まらないことも多い。できれば教科書会社等が教科書に関連する図や写真、データなどをWebページ上に公開してくれればありがたいと思うが、現状ではプリントの作成に時間がかかるのが一番の課題である。しかし、一度作成してしまえば、次年度以降はすぐに使えるので、活用効率はアップする。さらに、生徒の中には黒板に書かれたことをノートに写すことが授業のメインであると考えている者もいるので、補助教材であるプリントを見ながら説明を聞くことに慣れさせるのにも時間がかかる。これも課題といえばそうであるが、これは教科を問わず言えることである。

最後に、実習における教材の開発については、フィードバック制御の実習装置のように試行錯誤しながら完成するまでに6か月もかかったものがあったが、その試行錯誤は自分自身の勉強にもなり、ノウハウを蓄積することで力量アップにつながった。実習装置を自作することで、必然的に実習テキストも書くことになり、トータル的に力がついたように思う。以前、先輩の教員から「自分で実習を構築し、テキストを作れるようになったら一人前だ。」と言われたことが実感として分かった。さらに、手作り教材のため、故障してもすぐに修理ができることが長所である。また、デジタル回路の信号が1か0かを表示するデジタルテスターのように簡単なものならば生徒に作らせることもできるので、ものづくり体験をさせながら原理を理解させることができるのも長所である。しかし、コンピュータ制御などの技術の進歩が著しく、より高度に、より複雑になっているので、手作り教材ではその進歩に追いつけなかったり、自分自身の力量が追いつけなかったりで、なかなか難しい時代になってきている。これからは、メーカー教材の活用や企業等の協力を得るなどの工夫が必要であると痛感している。

このように、課題もあるが、生徒の専門教科に対する興味・関心が年々低下傾向にある中で、少しでも多くの生徒に電気のおもしろさ・不思議さを感じさせ、興味・関心をもたせるような手作り教材の開発と活用に取り組んでいきたい。

3 その他参考となる事項

御所工業・御所実業高等学校ホームページ <http://www.pref-nara.ed.jp/gihs/>

1 実践内容

生徒指導部長として私が心がけているのは、生徒一人一人を大切にできる心ある指導であり、正々堂々と生きる子どもを育てたいという思いである。毎年3月1日、生徒たちは我々教師に感動を与え、素晴らしい卒業式で胸を張って卒業していく。巣立っていく生徒たちを見ていると本校生徒指導の成果と集大成がこの式にあると感じる。時代が変わり、社会が変わり、子どもたちも変わった。高校生の生活様式も一変した。世間の若者に対する評価は決してよくはない。しかし、私はそうは思っていない。自己表現が下手なだけである。



未来に向かって正々堂々と生きる生徒を、高校の三年間で育てなければならないという重大な責務が我々に課せられている。保護者にも理解を得ながら、温かさの中にも毅然とした姿勢を貫き、教師集団の先頭に立って生徒たちを導いていかなければならないと痛感している。

(1) 基本的生活習慣の確立

基本的な生活習慣の確立は、けじめのある日々の行動にある。挨拶、礼儀、身だしなみ指導については、開校以来、力を注ぎ受け継いでいる。「当たり前のことを(A)」、「ぼーっとせず(B)」、「ちゃんとやる(C)」のA・B・Cが実践できるようたえず指導している。結果、きっちりやることの清々しさを身に付け、来校者に爽やかな印象をもって帰ってもらえる学校として評価していただいている。

また、日常の行動を規則正しく行うためには時間を自己管理する必要があり、遅刻減への取組は不可欠なものと考えている。遅刻生徒には、入室許可用紙に必要事項を記入させ入室を許可している。その際、必ず一人一人に声をかけるようにしている。話しかけることにより遅刻への注意だけでなく、多岐にわたった指導ができ、生徒理解の第一歩となっている。遅刻者数(クラス別)は生徒会執行部が月毎にグラフにし、生徒昇降口に張り出している。本年度からは遅刻生徒全員に生徒指導部による放課後の個別指導を始めた。その結果、遅刻は目に見えて減少した。

(2) 教育相談体制の充実

不登校傾向にある生徒や心に様々な悩みをもつ生徒が数多く在籍し、教育相談体制の充実が急務となってきた。学校に強く要望し、今年度、生徒指導部内に相談係を拡充してもらい、新たに保健室の横に相談室を新設した。教育研究所教育相談部のご指導のもと、カウンセリング体制も整備した。



生徒相談室

(3) 地域に愛される学校づくり

地元地域の協力なしに生徒の健全育成は不可能である。積極的な地域社会との交流を通じて、地域住民からの声に耳を傾け、協力を得ながら生徒指導を進めている。利用駅や通学路の清掃はもちろん、日々協力頂いている地元高取町の一人暮らしの老人

宅訪問実施や、高取城祭りに向けた運動部中心のボランティア清掃活動も年間行事として好評を得ている。地域社会の発展に貢献できる高校生の育成も目指していきたい。

(4) 外部機関との連携

高取町役場や橿原警察署とも親密な連携を図り、情報収集や非行防止・交通事故絶無を目指して、各種講演会や交通安全教室等の開催に協力を得ている。本年度は、新たに女性講師による女生徒への「性被害から身を守る」ための講演会も実施した。

(5) 国際感覚の育成

毎年、姉妹校等との交流を通して、異文化理解を深めるとともに、自国文化認識と母校愛を育ませている。平成7年度からの大韓民国への修学旅行を、平成14年度はグアム、平成15年度以降はマレーシア、平成20年度からはタイに変えて実施している。

(6) 新たな取組

二酸化炭素の排出量削減のため、公共交通機関を利用する教職員の「ノーマイカー出勤」を実施した。地球環境の保全に取り組む姿勢を生徒に示すとともに、登校時の生徒の実態を把握し、乗車マナーの向上が図れた。各学期に1回ではあるが、生徒会のエコ活動とともに定着させていきたい。

本校生の9割以上が所持している携帯電話は、使い方によって生活のリズムを崩し、更には人間関係上のトラブルを招くことにもなりかねない。携帯電話に依存しがちな生徒たちに「メールタイム設定運動」（午後9時以降のメール送信禁止）を呼びかけ、保護者の協力を得ながら進めている。

2 成果及び課題

生徒たちには「校則の遵守(K)」、「命を守る(I)」、「責任ある行動(S)」、「組織の一員としての自覚をもつ(S)」のK・I・S・Sを訴え続けている。徐々に組織の一員としての自覚をもち、責任ある行動が取れるようになってきた。これまでの取組が功を奏し、礼儀正しく爽やかで始めある行動ができる生徒が数多く育っている。一人でも多くの朝の表情を見るため、日々の校門



K・I・S・S

指導は欠かさず、生徒と笑顔で挨拶を交わす。自主的に校門に立つ教師が増え、活気ある一日がスタートしている。全教師による通学路の登下校指導も企画し、安全確保に全力をあげている。

高校生を取り巻く社会環境が激変している現在、未来に向かって正々堂々と生きる子どもを育てるために、生徒指導の果たす役割は極めて重大である。今後も社会の変化や保護者、生徒に応じた指導を率先垂範し、全教師に提案していきたい。足並みの揃った指導のもと一致団結し、胸を張り社会に出て行く子どもたちを育てていきたいと思っている。一人一人がもつ能力や資質を向上させ、生徒たちがこの学校を選んで本当によかったといえる高取国際高等学校を目指していきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立高取国際高等学校ホームページ <http://www.takatori-h.ed.jp/>

事例番号27 高等学校 特別活動の部

学校・地域・警察が一体となった生徒の教育について

奈良県立奈良工業高等学校（定時制課程） 生徒指導グループ

代表 教諭 金池 良通

1 実践内容

深夜、校門付近でのバイク・車の騒音、民家へのタバコや空き缶のポイ捨て、私有地への駐車等の苦情が近隣地域から学校に届いていた。校内外を問わず問題行動も起こり、警察署で頻繁にその内容報告を受けていたが、一方で素直でまじめな生徒もたくさん在籍しており、その子たちの良いところを伸ばすことはできないかと考えていた。



ある生徒のバイクでの自損事故をきっかけとし、生徒会を中心に自分たちで何かできることはないかを考えさせ、奈良西警察署に協力をお願いして平成17年5月からボランティア活動を開始した。翌年から、秋篠台自治会と警察の協力を得て、合同で夜間防犯パトロールをさせていただくことになった。

学校行事や考査後の特別指導日を利用してボランティアを募り、一緒にパトロールやゴミ拾いをしながら自治会内を回っている。毎回参加生徒は25名程度で、奈良西署員、秋篠台住民、青色パトロール隊の方々を含め50～60名程度で約1時間の活動をしている。パトロール後は、公民館に集まりいろいろな交流会を企画している。生徒たちは、卒業を前に交流の証として地域に何かを残したいという気持ちをもつようになり、「安全の鍵」の寄贈や記念植樹を行ってきた。今年度も、感謝の言葉を記した看板等を製作している。



夜間防犯パトロール

これまでの取組は以下のとおりである。

- | | | |
|----------|---|---------------------------|
| 平成17年5月 | 近鉄あやめ池駅前にて交通事故・非行防止の啓発活動（花の種等配布） | |
| 平成18年5月 | 秋篠台防犯パトロール、交流会（自己紹介） | 感謝の手紙をいただく |
| 平成18年7月 | 秋篠台防犯パトロール、交流会（子供会・敬老会と七夕の飾り付け、スイカ割り大会） | 感謝の手紙をいただく |
| 平成18年9月 | 秋篠台防犯パトロール | 雨天中止 |
| 平成18年12月 | 秋篠台防犯パトロール及び地域のゴミ拾い、交流会（新生徒会の紹介） | |
| 平成19年2月 | 砂型によるアルミの鋳造品「安全の鍵」を奈良西警察署長に寄贈 | |
| 平成19年2月 | 学校の近隣4自治会の防犯パトロール及び「安全の鍵」寄贈 | |
| | | 奈良西警察署長及び秋篠台自治会より感謝状をいただく |
| 平成19年4月 | 秋篠台自治会内「青色防犯照明実地実験」参加 | |
| 平成19年5月 | 秋篠台防犯パトロール及び地域のゴミ拾い | |
| 平成19年7月 | 秋篠台防犯パトロール | 雨天中止 |
| 平成19年9月 | 秋篠台防犯パトロール及び地域のゴミ拾い、交流会（奈良朱雀高校の紹介） | |
| 平成19年12月 | 秋篠台防犯パトロール、記念植樹、交流会 | |



自治会に「安全の鍵」を寄贈

(生徒会紹介、ゲーム大会)

- 平成20年 2月 プレート及び記念写真寄贈 秋篠台自治会より感謝状をいただく
平成20年 5月 秋篠台防犯パトロール、交流会(奈良朱雀高校新入生紹介、看板の提案)
平成20年 6月 奈良西警察署長に本年度寄贈品の製作決意を表明
平成20年 7月 秋篠台防犯パトロール、交流会(クイズ大会)
平成20年 9月 秋篠台防犯パトロール、交流会(子供会と「交流の花」の製作)

2 成果及び課題

(1) 成果

- 心の教育 60歳以上の方々とふれあうことの少ない生徒にとって、パトロールや交流会の活動は、世代を超えた人の温かさや相手のことを思いやることの大切さを知る機会となった。
- 不良行為の抑止 自分たちの活動が地域に貢献していることを知り、それまで迷惑行為をしていた生徒が、自分の行動を振り返る中で、地域に迷惑のかかる行為をしてはいけないと自覚し自制するようになった。さらに、自己の行動すべてを見直すようにもなった。
- 自己への自信 中学時代不登校の生徒が、地域の人と打ち解け合う中で自分に自信をもち、自分の気持ちをうまく相手に伝えられるようになった。就職試験の面接の中でパトロールのことを話し、見事合格した生徒もいる。
- 自主性の芽生 先生に勧められて参加していた生徒が、回を重ねるにしたがって自分の意志で参加し、友達を誘うようになった。また、中心となった生徒たちには、毎年自分たちが交流した証を形として地域に残したいとの気持ちが芽生えた。
- 意識の向上 この活動からボランティアに興味をもつようになり、他のボランティア活動に自主的に参加する生徒もでてきた。また、防犯意識を高めることもできた。
- 苦情の激減 自治会の集会で、住民の方から生徒を弁護する発言をいただいたり、「定時制の生徒」=「悪い生徒」ではなく様々な子が集まる一集団ととらえ、生徒の実態を理解していただけるようになった。

(2) 課題

協力的な奈良西署員の方々や「生徒さんの勉強のためだから」と言って、毎回パンをくださる地域の方々の理解と協力の下での実践である。このような関係を構築するためには、「教育の機会」として学校の意図するところを、警察や地域に事前に十分理解していただく必要がある。さらに、活動を形骸化させることなく常に新鮮さを保ち続けるために、時には自治会の役員会に参加するなど、担当者はもちろん、組織レベルでのお互いの関係を継続し深めていくことが重要であり課題であった。

3 その他参考となる事項

奈良県立奈良工業高等学校定時制課程ホームページ

<http://www.pref-nara.ed.jp/nths/teiji/>

1 実践内容

本校は、生涯スポーツ科と普通科の併設校であり、卒業生の進路は、進学、就職と多岐にわたっている。生徒は、様々な進路に対応するため第1学年よりコースや科目を選択し、最終学年になると受験校や企業を選択することとなる。その選択は、「自分のやりたいこと」による未来の選択でなければならないが、進路相談に際して、安易に指定校推薦の制度により進学しようとしたり、「かっこわるい仕事はしたくない」、「責任をもって仕事をすることに耐えられない」という話があることも事実である。



これらの課題に対応するためには、在学中にできるだけ具体的に卒業後の自分自身の姿を描かせ、「自分のやりたいこと」に基づいた進路選択をさせる必要がある。そのため、外部の関係諸機関、保護者、卒業生等と連携し、次のような教育活動を実践している。

(1) 総合的な学習の時間「みらい」(1年で1単位)

平成15年度 次年度の「みらい」実施に向けて委員会を設置し検討

平成16年度 2年生で1単位実施、「進路指導部」で担当

第1学期……適性検査などにより自己を見つめる

第2学期……保護者を講師とした職業人講演会

事業所を訪問し、レポートを作成する「職業人インタビュー」

第3学期……「私のしごと館」における職業体験

レポートを全員で共通体験するためのプレゼンテーション

平成20年度 1年生で1単位実施に変更

総合的な学習の時間を統括する分掌として、「総学企画部」を設置
インタビューで訪問する事業所数を約60に増やすとともに、大学・短大・専門学校も訪問先として選択させる「キャリアインタビュー」とする。

(2) 総合的な学習の時間「チャレンジタイム」(3年で2単位)

生徒が選択可能な「チャレンジタイム」14講座のうち、3講座を大学、短大、専門学校との連携により、本校で専門的な講義が受講できるものとした。

平成19年度 開講に向けて検討委員会を設置

連携各校との協議、連絡調整

講義内容についてシラバスの作成

平成20年度 「総学企画部」が担当

次の3講座を開講



キャリアインタビュー

「奈良を学ぶ」…… 大学との連携による、「奈良」についての経済や文学、歴史、文化面からの学問的アプローチ

「スポーツマネジメント」…… 大学、短大、専門学校との連携による、スポーツ分野における学問的アプローチ

「健康マネジメント」…… 大学、短大、専門学校との連携による健康分野における学問的アプローチ

(3) 進路説明会

主に専門学校との連携による体験型説明会（1年）

職業人パネラーのパネルディスカッション（2年）

フリーターについての講話（3年）

(4) 夏期進路講座

進路補習のうち3日間を大学で実施し、大学教員による模擬講義、小論文講座、面接講座を開講

(5) 保護者・卒業生との連携

キャリアインタビューへの協力依頼、育友会学校訪問、「進路だより」を毎月発行、野外活動実習で卒業生がキャンプファイヤー等を指導

(6) その他

ジョブサマースクール及び企業見学、インターンシップへの参加



パネルディスカッション

2 成果及び課題

卒業後の姿を、在学中にどう具体的に描かせるか。そのために、進路指導関係の行事を設定し、総合的な学習の時間の枠組みを決定してきた。様々な体験を通して、多くの生徒は「自分のやりたいこと」を土台として、進学先を選択することが可能となった。また、将来の進路を具体的に見据えた科目選択が可能となり、就職希望者の受験先の決定に当たっては、ほとんどすべての生徒が企業を見学し、進路決定に生かしている。

高大・高専連携はいうまでもなく、外部の関係諸機関、保護者、卒業生と連携し教育活動を実践する際に大切なのは、「その連携が一時的なものではなく、継続的なものであること」、「高等学校と連携先が、相互に協力していける連携であること」の2点であると考え。以前より本校においては、求人開拓の時間確保や費用負担、進路行事や総合的な学習の時間の位置付けなど、キャリア教育の推進に教職員が理解を示し、継続的に教育活動を実践してきた。しかしながら、多彩な選択授業の設定や学校外の教育力の活用により、教職員の負担が増加している側面もみられる。また、本校としても、大学の学生に研修の場を提供したり、教員が大学で話をする機会をもつなど、相互に協力する姿勢が求められている。

これからは、学校におけるすべての教育活動について、キャリア教育の観点から位置付け体系的に関連付けられたものとして実践していく必要がある。「学ぶこと」を「働くこと」へ、「働くこと」を「生きること」へつなぐための教育活動を今後も推進していきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立大和広陵高等学校ホームページ <http://www.koryo-hs.ed.jp>

1 実践内容

私は、33年間赴任先のそれぞれの学校で、生徒たちと陸上競技を通して、たくさんのことを学んできた。教員になった当初は、私の目標に子どもたちを近づけることに力を注ぎ、その溝を埋めることができない生徒には、苦痛ばかりをあたえていたのではなかったかと思っている。学生時代に生理学を専攻していたため、その分野の知識や理論が私にはすべてであり、それを無理やり押し付けていたようにも思う。練習中、私のことばかりを意識させてしまい、本来の目的から外れた時間を生徒たちに過ごさせていたのではないかとも思うようになった。しかしながらそれ以後は、指導の基本は、押し付けではなく生徒の自主性を尊重し、やる気を出させることであり、また個性を伸ばすために、生徒の練習を見守る方向へと変わってきた。



橿原高校に赴任し3年目をむかえている。毎年約10名程度の生徒が入部しているが、本年度は例年の倍に近い20名が入部してきた。男女の割合は3対1で男子の部員の多いのが特徴である。練習は早朝と放課後の2回、ただし早朝練習については参加は自由としているが、大半の部員は自主的に参加をしている。時間を有効に使うということで基本的には個別練習の形を取っている。練習に来た生徒から挨拶をし、自分のペースで課題に向けて取り組んでいく。終わった生徒から後片付けをし、学校生活へと入っていく。本年度から放課後全員が同じ時間に練習に出ることができるようになったが、昨年までは校時の都合で全員が同じ時間に練習を始められず、部としてまとまってなにかをすることができなかった。また、下校時間が午後7時30分と決められており満足に腰を据えた練習ができない状態であった。しかし、逆にそのことが生徒一人一人の目的意識や自立心を高め、依存心を除き、わずかな時間でも有効に活用できるようになった。また、試合でも場面に応じて自分を落ち着いてコントロールし、力を発揮する能力を育てることに役立っているように思っている。練習は個々の課題に取り組むことを優先させ、創意工夫をすることで効果をあげ、練習場所も近くの橿原陸上競技場をなるべく利用し、使用させてもらうことで質の高い練習を集中してできるように考えている。陸上競技は当然個人競技であり、一人一人の目標は異なる。本校でも全国大会優勝を目標とする者から、卒業までに一度は予選を突破したいと思っている者までいろいろである。しかしながら、一度も予選を突破したことがない生徒が、卒業時に「みんなの心に残るような記録や結果を、私は残すことができませんでしたが、最後のインターハイでは、自分の心に永遠に残

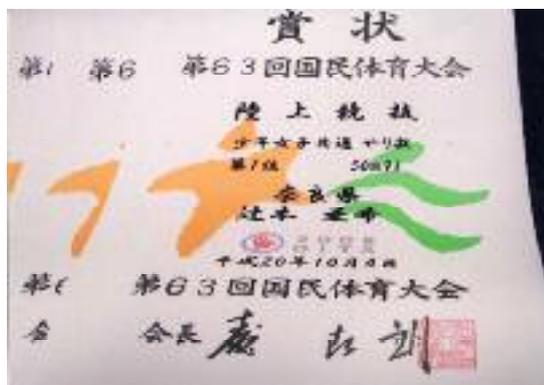


国民体育大会の表彰式

る結果を残すことができ感謝しています」という言葉を、私や後輩に残してくれた。これからも、生徒たちの目標が少しでもかなえられるよう、見守っていきたいと思っている。

2 成果及び課題

本年度、埼玉県で開催された全国高校総体には、昨年度2年生ながら女子槍投げで、3位入賞を果たしている辻本亜希が、優勝だけを目標に参加した。しかしわずかの差で敗れ、本人は目標を達成できず、周りの人たちの期待にも応えることができず、悔し涙を流した。この経験は順調に歩んできた彼女には大変な試練ではあったが、大きな財産にもなった。秋に大分で行われた国民体育大会は、彼女には高校生活最後の大会でもあった。最後の6



国民体育大会での優勝の賞状

投目、全国高校総体の悔しさと、3年間のすべてをこの1投に込め、その結果大逆転をし、目標としていた50Mを超える50M91（高校歴代7位）で優勝することができた。いろいろな側面から彼女を支えていただいた方々に感謝するとともに、最後まで諦めずに集中していた彼女の姿勢に、勝負に対する執念をみることができた。

昨年度は、急激に力をつけた山本恭平が、初めての全国高校総体や国民体育大会で入賞を果たし、全国大会を身近な目標に変えてくれ、チームに活力が生まれた。本年度はチームの中から全国大会優勝者が生まれたことで、さらなる向上心が芽生えてきた。やればできるという雰囲気、時間を大切にしようとする姿勢が大会においても安定した結果を残すことに役立っていると思う。まだまだ不足している点も多くあるが、自分の目標に少しでも近づき達成できる人間に育てていきたいと思っている。

平成19年度	全国高校総体	男子	400M	6位	山本 恭平
		女子	槍投げ	3位	辻本 亜希
	国民体育大会	少年A	400M	6位	山本 恭平
		全日本ユース大会	女子	槍投げ	1位
平成20年度	全国高校総体	女子	槍投げ	2位	辻本 亜希
	国民体育大会	女子	槍投げ	1位	辻本 亜希

1 実践内容

本校で生徒会指導部の仕事をするようになって6年になる。毎年次々にやってくる行事をこなしていく一方、中心となる生徒会の役員も育てていかななくてはならない。本校の場合、リーダーシップが取れるような生徒は部活動に入ってしまう。しかも各部活動が熱心に活動しているため、生徒会と両立させるのはなかなか難しいのが現状である。そのため、生徒会役員となる生徒は基本的に部活動をしていない、比較のおとなしいが個性の強いタイプが多い。そのような生徒たちにやりがいを感じさせながら活動を続けさせるために、生徒のアイデアをできる限り取り入れて実現できるように最大限努めている。



(1) 「生徒会スタッフ」の創設

本校では毎年9月に生徒会本部役員の改選を行なっているが、候補者探しに苦労しているのが実状である。そのような中で、行うようになったのが「生徒会スタッフ」と呼ばれる生徒の受け入れ体制である。これは、立候補をして人前で話すことはなかなかできないが、生徒会の事務的な仕事はやってもよいという生徒を生徒会室に迎えて本部役員と同じように活動してもらう組織である。当初、本部の生徒とつながりのある者だけの集団であったが、最近では部活動に入部するのと同じ感覚で様々な学年の生徒が生徒会室を訪れるようになり、学年間の意見交換もできるようになってきた。こうした傾向は生徒会活動の広がりを進めるとともに、それまであまり目立たなかった生徒に存在感が実感できる「居場所」にもなっている。また、同時に様々なアイデアを出し合える場にもなっており、行事内容を企画するときの大きな原動力になっている。

また、毎週1回定例会を開いてその週に行う仕事の打合せと、終わった仕事の反省を行っているが、特に仕事の実施直後にその内容を振り返っておくことで、それぞれの持ち場で起こった問題点を全員で共有し、次回に生かすようにしている。

(2) 学校行事における取組例

部活動に参加している生徒の力を借りて行っているのが新入生歓迎行事関係と3年生を送る行事である。事前に本部役員が考えた企画をキャプテン会議を開いて提案し、協力を仰いでいる。昨年度を例にとれば、3年生を送る会の最後に、途中でひそかに体育館の外へ出た在校生のクラブ員が体育館から退場した3年生を拍手で待ち受ける企画を行なった。3年生たちは思いがけない見送りに驚きの声を上げ、好評であった。この協力体制は、年に4～5回行っているレイン



レインボー隊活動の様子

に驚きの声を上げ、好評であった。この協力体制は、年に4～5回行っているレイン

ボー隊活動（ボランティアの清掃活動）でも力を発揮しており、毎回300人前後の参加がある。

また文化祭は、生徒の受身になりがちな参加状態をどうにか改善できないかという問題提起から、ここ数年、毎年様々な角度から新しい企画を提案している。その中でも特にクラス単位で行う企画を重視することにより活性化を図っている。

ここ数年行なっている企画では、すべての発表に共通するテーマ作りや、「クラス対抗ハモネプ大会」などがある。テーマは、それまでのスローガンのものを改め、



クラス対抗ハモネプ大会

文化祭をより具体的にイメージしていけるようなものを生徒から募集し、生徒会役員が選んでいる。今まで「刻め!」、「繋げ!」、「驚け!」などのテーマのもとに、様々な解釈を加えたクラス展示作品が生み出され、発想のヒントとなっているようである。「クラス対抗ハモネプ大会」は、クラスの代表チームによるアカペラのコンテストで、当然夏休み中に練習が必要だが、どんなにうまく

いかなくても棄権することはできないことになっている。初めは不満がちだった生徒も、全校生徒の前で発表した後は満足した様子を見せ、惜しくも入賞を逃したチームをはじめ、また来年チャレンジしたいと思う生徒も多い。そのような理由でこの企画は3回目を迎えている。いずれの企画も本部役員が考えたものだが、計画を細かく立てて取り組んだものの、不満をぶつけられて困惑してしまう場面もたびたびあった。しかし、最終的に楽しげに発表しているクラスの様子を見て本部役員も達成感が得られ、今後の励みにもなっているようである。そして何よりも文化祭後のアンケートで、クラス発表に関して何も参加しなかったという生徒が大幅に減少している結果が出て、自分たちの地道な取組に大きな自信を深めているようである。

2 成果及び課題

本校は、1学年8クラスで歴史文化科・国際英語科・国際教養科・普通科という4学科をもつ。そのため、科の特性まで反映して様々な個性の生徒が集まっている。部活動も盛んで半数を越える生徒が入部して熱心に活動しているが、それ以外の生徒にも、学校行事などを通じて、その個性をできる限り生かせる場を作ってやるのが人間関係を広げ、本校における「居場所」を見付けることにつながるのではないかと考える。そして、そういった場を作るには、教師の側からの押し付けではなく、やはり同年代の生徒の発想と呼びかけが重要である。

今後も生徒が本校に入学してよかったと思えるような充実した学校生活を送れる学校にしていくことを念頭に、生徒とともにがんばっていきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立法隆寺国際高等学校ホームページ <http://www.horyuji-h.ed.jp>

1 実践内容

今回の実践報告は、私個人の努力でできたことと言うよりは、大宇陀高校という組織にあって、学年主任としての成果はその学年に属していた先生方の成果であり、教務部長としての成果は教務部員の先生方の成果に他ならないし、他の学年・分掌の協力なくして成し得ないことであるのは言うまでもない。私が着任して感じたことは1人あたりの教職員が担当するその業務の多さである。



学校としての業務はその規模の大小によらないが、こなず職員数が少ないのであるから当然である。私はそのことを肯定的にとらえることにした。様々な業務が経験できること、責任のある立場につけること、横の連携がとりやすいこと、着任して数年すれば前例にとられることなく新しいことに挑戦できること、少々のミスはすぐにカバーできること等である。私が感じる多忙感は他の先生も同様であるから、担任をしている立場の時は担任の業務の効率化を図り、他の担任の業務効率も上げる。同様に学年主任の時には学年主任の業務の効率化を図る。そして今、教務主任としては、教務的業務の効率化はもちろんではあるが、学校全体の業務の効率化を図りながら必要な業務への労力のシフトを図っているところである。そこでまず、定型業務はIT化を進めれば相当な省力化が図れると考えた。そして、既存の業務は全職員に広報し情報を共有化することでアイデアを取り込み、より魅力のあるものに変えていけると考えた。

< 具体的取組 >

担任業務関係

中間考査成績発送用個表作成システム、調査書・単位修得証明書作成システム、進路指導用データベース管理システム等のソフト開発、HR資料の収集・ファイル化及び共有化

学年主任業務関係

成績会議資料作成システム等のソフト開発

ファイルの収集・再フォーマット等の整備（当時各学年主任がワープロで個人管理し転勤等で引継ぎ不十分であったため）とサーバーでの共有化、「総合的な学習の時間」の多世代交流プログラム（老人ホーム訪問、幼稚園訪問・招待、幼稚園児・小学生イモほり交流）の改善、地場産業体験プログラムの開発（磨き丸太）、地域との交流プログラムの発展（地域での美化活動、コスモス迷路の地域への開放）、卒業スピーチの文集化と全職員への配布、学年通信発行による広報

教務的業務関係

サーバーにある共有フォルダの整理、IT機器5年更新時の必要な機材の整備、教務

的業務の電子マニュアル化、役割分担の細分化による人材育成、HPの整備による適正な情報発信、内規の検討・整備による学習指導・評価の基準の明確化、成績記点表・一覧表の自動作成システム、成績関係を扱う教務処理システム、指導要録作成システム、特色選抜・一般選抜・第2次募集による選抜に対応できる入試システムや卒業証書作成システムの開発、全授業の全時間公開の原則の確立、すべての学校行事のビデオDVDの作成、卒業生を招いての学校説明会の実施



「総合的な学習の時間」の幼稚園交流事前指導用ビデオの画面



電子マニュアルの一部

2 成果及び課題

本校着任当時、3年担任と2つの分掌の仕事、5科目の教材研究やテスト作成等による多忙を感じ、生徒と向き合う時間を増やす必要性を感じていた。そこで、IT化で解決できることも多いと判断した。成績処理等の定型業務の省力化が進み教科の教材研究の時間の確保ができ、分かる授業への助力となっている。生徒との面談時間が増やせ、落ち着いたクラス経営ができるようになってきている。多様な「総合的な学習の時間」の要項や各種学年行事の学年から学年への引継ぎがサーバーでの画像等を含んだデータででき、学年主任以外のメンバーもいつでも資料を閲覧できる状態であるため、各先生方から様々なアイデアが出やすくなっている。全行事の記録をDVD化しているので初めての生徒も先生も事前に研修ができスムーズな運営ができています。サーバーでの電子マニュアルの存在や役割分担の細分化により職員のITスキルの向上が図れている。これまで強引に推進してきたことも多いが職員の協力が得られるようになったのは、目に見えて業務の省力化や合理化が図られたことと、学校行事・学年行事等への全職員の参加意識が充実してきたからと思う。今後は現状が当たり前という前提で更に魅力のあるシステム開発や行事の改善を図り、社会で通用する生徒を育てることへ力を注がなければならない。

3 その他参考となる事項

奈良県立大宇陀高等学校ホームページ <http://www.ouda-h.ed.jp/index.html>